

[illegible]

平成31年3月



〈高島市まちづくり推進会議について〉

高島市では平成27年度より「高島市まちづくり推進会議」を設置して、市民と行政が一体となって地域の課題や振興策について検討することで、市民協働によるまちづくりを推進してきました。

〈表紙とP. 2のイラストについて〉

第2期高島市まちづくり推進会議の1年目（平成29年度）に、市民と行政が、現状を踏まえた理想の高島市について考えるワークショップを実施しました。その成果と、市民や市民活動団体、企業、行政などへのヒアリング調査の結果から、高島市の暮らしで感じる「豊かさ」の要素を集めて「高島市の将来像」を作成しました（詳細についてはP. 38からP. 41を参照）。未来に向けた「市民の思い」が詰まっています。（イラスト：松井亜紀）

ごあいさつ



日頃は、高島市まちづくり推進会議の運営にご理解とご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

市民が理想とする「高島市の将来像」をつくることから始まった「第2期高島市まちづくり推進会議」。メンバーそれぞれ大変忙しい中、市民が豊かさを感じる「高島市の将来像」とはどんな地域のことなのかを知り、その実現に向けて地域の現状や課題を把握するため、アンケートやインタビュー調査等を実施し、今後のまちづくりに活かす提案等をこの活動報告書にまとめました。

「まちづくり」とは、まちを大切にする、他の人たちに配慮し、自分ができる限りまちに関わることではないでしょうか。現在も様々な課題があると思いますが、市民、行政が同じ目線、同じ理解のもとに頑張ることが大切なことではないでしょうか。このまちづくり推進会議は、市民目線でこれからの市のありかたを、市民協働のまちづくりを進めていく会議です。私は、この報告書を見た市民の皆さんが、面白そう、自分も関わりたいという気持ちになれるかどうか最も大切であると思っています。また、様々な世代や高島のすべての地域の人たちが一緒にまちづくりに携わり、地域の特性を活かして一体感のある「まち」を作り上げてほしいと考えています。

第2期高島市まちづくり推進会議 委員長 木津陽介



高島市では、平成27年度から地域課題の共有や解決に向けた取り組みなどを、市民のお立場で検討いただき、市民協働による魅力あるまちづくりを推進することを目的に、高島市まちづくり推進会議を設置させていただいております。

第2期（平成29～平成30年度）の委員の皆様には、高島市の持続可能な発展に向け、人口減少や社会・経済構造の変化、気候変動などの潜在的な課題を考慮した「高島市の将来像（2040年）」を描き、地域の特性や現行の政策などとの関係性を整理した上で、将来像へ向かう道筋をデザインしていただきました。

その後、5つのテーマごとにグループに分かれ、「豊かさを感じられる高島」を目標に現状把握のために地域に出向き、実態調査や研究を重ね、市民と行政それぞれに向けたご提案を寄せていただいたところです。

この提案は、人口減少・少子高齢化と財政の健全化等の課題が山積している市政において、市民と行政が協力して市民協働によるまちづくりに取り組む上での貴重なヒントになるものと考えます。

最後に、委員の皆様および滋賀県琵琶湖環境科学研究センター、総合地球環境学研究所をはじめとするコーディネーターの皆様には、2年間にわたり大変お世話になりました。ありがとうございます。心から御礼申し上げます。

高島市長 福井正明

目次

ごあいさつ	3
-------------	---

第1部

第2期高島市まちづくり推進会議グループ活動報告（5グループ）

地域が支える子どもが地域を支える高島市	8
高島市で働く若い世代は何を求めるか	14
子ども目線で作る地域で学び育つ場	18
高島の伝統文化「神社とお祭り」を活かすまちづくり	22
人とつながる小さな農業で自然を活かす	31

第2部

第2期高島市まちづくり推進会議の概要

第2期高島市まちづくり推進会議の挑戦	36
高島市の将来像を創ろう	38
高島市の将来像を数値で見よう	40
活動記録	42
第2期高島市まちづくり推進会議関係者一覧	45



P. 8 〈地域で支えあうコミュニティづくり〉グループ

「地域が支える子どもが地域を支える高島市」

あなたにできる地域と子どものつながりを考えよう。子どもとコミュニティの関係から、どんなまちづくりが期待されているのか。子育て世代へのアンケート調査から検討しました。

P. 14 〈多様な働き方ができる〉グループ

「高島市で働く若い世代は何を求めるか」

高島市に若者が残るためには、市内で働きたいと思える環境があることが大事。では、若者はどんな働き方や暮らし方を求めているのでしょうか。アンケート調査の分析から明らかにします。

P. 18 〈地域で学び育つ〉グループ

「子ども目線でつくる地域で学び育つ場」

「子ども目線」の学び育つ機会とは何かを考えるために、高島市で活動する「子ども食堂」と「冒険遊び場」を対象に、関係者に取材しました。子どもが生き生きと、いろんな体験ができる高島市になるための方策を検討します。

P. 22 〈高島の文化〉グループ

「高島の伝統文化「神社とお祭り」を活かすまちづくり」

高島が本来持っている資源を最大限に活用するまちづくりとして、伝統文化の「神社とお祭り」を選択して活動しました。マキノ町「海津力士祭り（海津・西浜合同祭）」、新旭町「七川祭」、高島「大溝祭」の関係者にインタビューをして、お祭りと地域社会のつながりを考えました。

P. 31 〈活かす自然・守る自然〉グループ

「人とつながる小さな農業で自然を活かす」

高島の豊かな自然を活用するヒントを、家庭菜園など小さな農業の視点から検討しました。野菜をおすそわけする関係や、農業にチャレンジする移住者を助ける地元の方の姿が浮かんできました。身近な自然とのかかわりの可能性を検討します。



第 1 部
第 2 期高島市まちづくり推進会議
グループ活動報告

活動テーマ

地域が支える子どもが地域を支える高島市

私たち「地域で支えあうコミュニティづくり」グループは、子育ての側面から地域と子どものつながりについて知りたいと考えました。掲げたテーマは、『地域が支える子どもが地域を支える高島市』あなたにもできる地域と子どものつながりを考えよう』です。

このテーマには、「今、地域の人たちで子育て世帯を支えることが、結果的に、将来、地域を支えてくれる存在を育てることにつながる。そんな地域住民同士の支えあいが、連綿と続いていく高島市になればいいな」という願いが込められています。

テーマの背景

高島市の将来像を描いた時に、今の子どもたちが将来高島市で暮らし、地域を支える存在となり、活躍している姿を思い描きました。その将来像を実現するためには、子どもたちが地域のことを思い考える大人に成長することが重要だという結論に至りました。

そこで、子どもの頃から地域と関わり、地域とつながる経験をしていることが、地域を思う心を育むのではないかと考え、現在の地域と子どものつながりを調査してみようということになりました。

活動目的

子育て世代の親たちは、どのように

子育てを乗り越えているのでしょうか。また、地域（区・自治会など）や制度に何を期待し、支援制度や施設などの程度活用しているのでしょうか。そして、地域と子どもたちにはどのようなつながりがあるのでしょうか。また、地域に住んでいる方は子育て世帯に対して、どのような支援をしたいと考えているのか。実際の意識を把握することが、確かなニーズに応じた地域資源の活用や施策の検討に必要なと考えました。そこで、子育て世帯を対象にアンケート調査を実施しました。

活動方法・スケジュール

①子育てに関する制度や現在の市の取



図1 『高島市子育て応援ぶっく』

子育てに関する支援制度について、妊娠から出産、保育園から中学校までの、子育て支援制度がまとめられている『高島市子育て応援ぶっく』を参考に確認しました。（<http://www.city.takashima.lg.jp/www/contents/1159754198956/files/kosodate.pdf>）

このパンフレットには、支援制度だけでなく、教育施設の連絡先、子育て関連施設のマップや相談窓口情報など、子育てに必要な情報がたくさん掲載されています。

り組みを知るために、『高島市子育て応援ぶっく』（図1）を確認した。
②聞き取りの結果を踏まえ、アンケートの内容と質問事項を検討した。
③アンケート調査の実施
④アンケート結果の集計・分析結果の共有と考察

アンケートの対象者・項目・配布

高島市内で、新興住宅地と旧来からの集落とが混在している新旭町区域（北小学区）に限定してアンケート調査を実施しました。子どもの年齢に応じて、地域と子育て世代とのかかわり



写真1 アンケート結果を検討するグループ会議

〈アンケート調査の概要〉

アンケート実施期間

平成 30 年 11 月 15 日から平成 30 年
11 月 30 日まで

アンケート回収状況

配布世帯数：743 世帯

回収枚数：550 枚

回収率：74%

アンケート結果

○家族構成

三世帯同居 9.1%

○親の市内居住有無

市内居住 85%

○自治会加入状況

550 人中 460 人が自治会に加入して
いる。

○活動回数

平均活動回数は 5、6 回／年である。

がどのように変化するかを調べるために、さくら園、新旭北小学校、湖西中学校の園児・児童・生徒の保護者を対象に実施しました。各園、学校へ必要枚数を持参し、学校において配布、回収を依頼しました。兄弟姉妹のいるご家庭については、1 件のみ提出をお願いしました。

主な質問事項は以下のとおりです。

- ・ 基本情報（居住地、居住年数、家族構成、市内に親が居住しているか等）
- ・ 自治会への加入状況（「いいえ」の場合はその理由）
- ・ 自治会および地域活動への参加状況（参加回数、どんな地域行事に参加しているか、参加理由など）

アンケート結果の分析

参加行事

「あなたの家族はどのような地域行事や地域活動に参加していますか？」の質問項目に対して、以下の選択肢から回答を得た。

1. 祭り（祭事、夏祭り、盆踊りなど）

- ・ ご近所とのコミュニケーション頻度
- ・ 子育てにおいて地域コミュニティに期待すること
- ・ あなたが地域でできる子育て支援について
- ・ 行政が提供している子育て支援制度の利用状況

2. 子ども会

- 3. 運動会・スポーツ大会
- 4. 自治会集会
- 5. 文化祭
- 6. 防災訓練
- 7. 清掃活動
- 8. 旅行
- 9. 地域サロン活動
- 10. その他

地域活動の参加で一番多かったものは「祭り」の 24%（428 人）であった。次に多かったのが清掃活動で 23%（398 人）、子ども会で 18%（324 人）であった（図 2）。

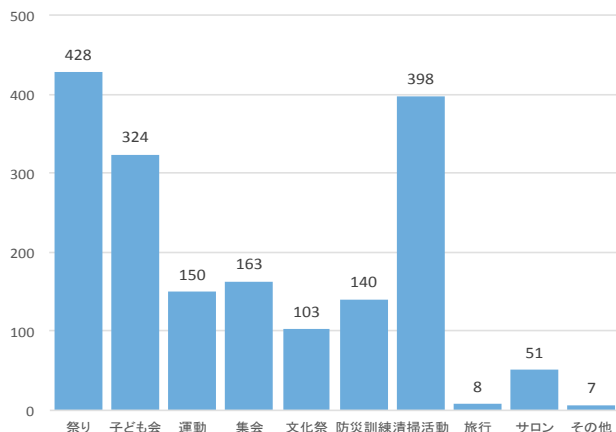


図 2 参加している地域行事や活動

伝統行事には多くの方が参加され大いに子ども会活動や、清掃活動の参加割合が高かった。

地域行事や地域活動に参加される理由

自治会への参加平均回数が 1 回以上と回答された方の中で、「地域の人のかわりが必要だから」と答えた人が 35%（311 人）、「子どもの成長に必要なだから」と答えた人が 31%（268 人）、「地域でのくらしに必要なから」と答えた人が 29%（250 人）であった（図 3）。

参加している人のうちの 3 割が地域での子どもの成長に必要なと感じている。

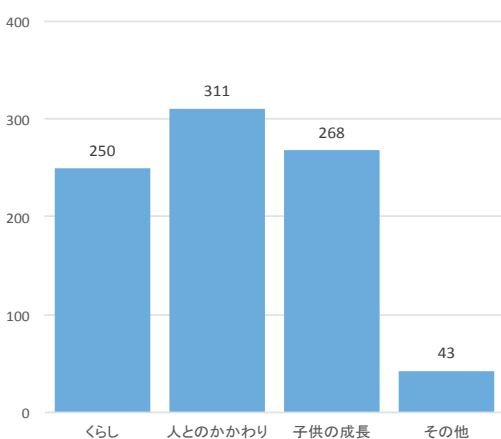


図 3 地域行事や活動への参加理由

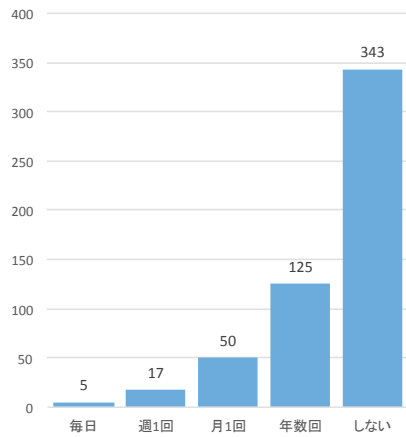


図5 ご近所との困りごとを相談する頻度／年

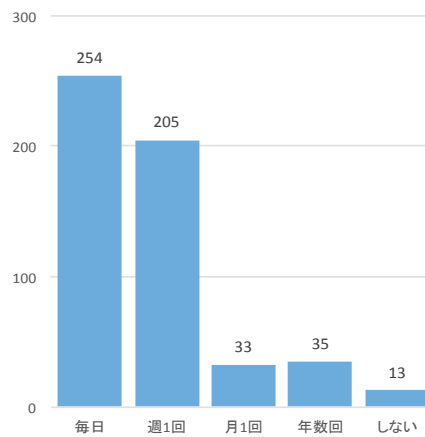


図4 ご近所と挨拶をする頻度／年

ご近所の方とのコミュニケーション頻度
 ご近所の方とのコミュニケーション頻度についての質問項目に対して、挨拶は47%（254人）の人が「毎日している」と回答しました（図4）。にもかかわらず、「家を行き来したり」、

地域の人々に子どもを預けることができるか
 「地域で子どもを預ける場合、誰に預けることができますか」の質問項目に対し、親族49%（361人）、友達

「生活面で助けあったり」、「困りごとを相談する」の項目に対しては、「しない」と回答した人が63%、65%と半数以上を占めた（図5・6）。
 深いコミュニケーション関係までは求めているようである。就労形態が変化したことで生活時間の使い方が多様化し、ご近所同士で顔を合わせる機会が減った。そのため近所のコミュニケーションが希薄化し、子どもたちが地域社会で地域の人とかかわる機会が少なくなっているのではないかと考えられる。

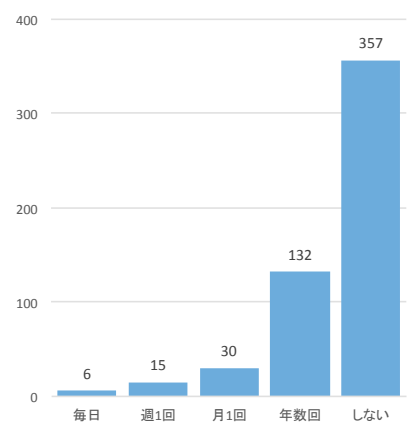


図6 ご近所との生活面で助けあう頻度／年

見守られていると感じるか
 「子どもたちが地域に見守られていると感じますか」の質問項目に対して、「はい」と答えた人は78%であった。

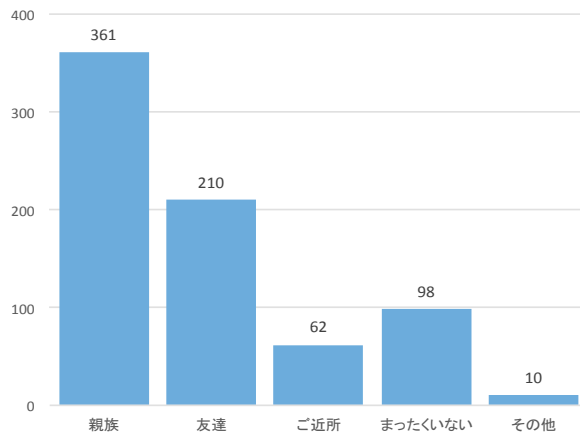


図7 子どもの預け先

が28%（210人）、ご近所に預けられる人が9%（62人）という結果であった。しかし、全くいないと答えた人が13%（98人）であった（図7）。
 預け先が「親族のみ」と「親族と友達」と「友達のみ」と回答した人で571人いた。そのうち273人は「親のみ」しか預け先がないと回答した。親に預けられなくなった時の頼り先がなくなることが考えられる。

地域に期待していること

- 「子育てについて地域に期待していることは？」の質問項目に対して、以下の選択肢から回答を得た（図8）。
1. 子育て世帯への理解（泣き声などへの寛容さ）
 2. 子どもがあぶない遊びや行動をしていたら声をかけてほしい。
 3. 子どもが犯罪などにまきこまれないように見守ってほしい。
 4. 子どもを預かってもらえる場がほしい。
 5. 地域で子どもたちが安心して遊べる環境を整えてほしい。
 6. 子どもが参加できる取り組み・地域行事を増やしてほしい。
 7. 郷土の歴史文化、伝統芸能などを伝えてほしい。
 8. 大人と触れ合う機会を増やしてほしい。
 9. 特にない。
 10. その他
- 地域に期待していることは「犯罪などに巻き込まれないように見守ってほしい」が27%（452人）、「危ない遊びや行動をしていたら声をかけてほしい」が25%（418人）、「地域で安心して遊べる環境を整えてほしい」が18%（300人）、「子育て世帯への理解（夜泣きなどへの寛容さ）」が12%

(189人)と高かったが、地域に預かりを期待している人は4%(58人)と少なかった。

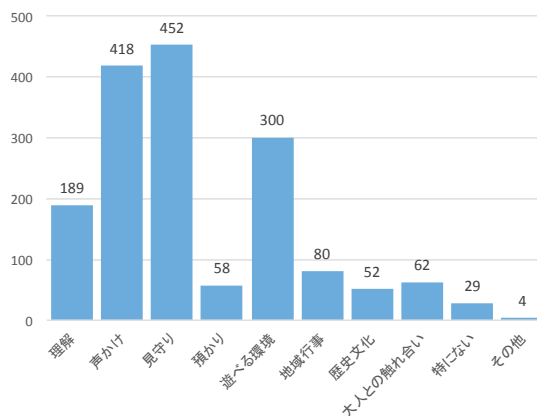


図8 子育てについて地域に期待していること

子育て世帯の方が地域でどのような支援ができるか

「あなたは地域で子育てに関してどのような支援ができる、または既にこなっていますか?」の質問事項に対して、以下の選択肢から回答を得た(図9)。

1. 子育てに関する相談にのる。
2. 子どもがあぶない遊びや行動をしていたら声をかける。
3. 子どもが犯罪にまきこまれないよ

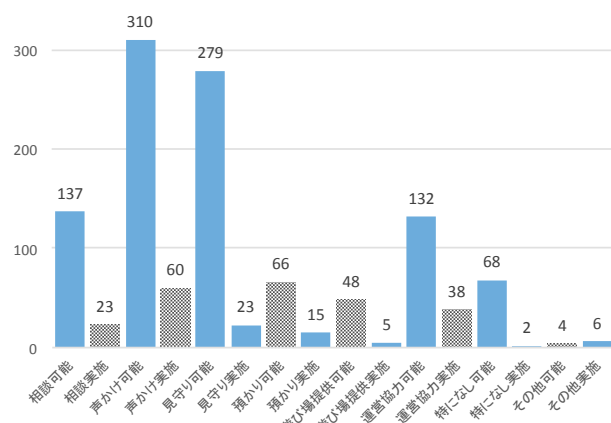


図9 自分が子育てにどのような支援ができるか

4. 子どもを預かる。
 5. 安心して遊べる環境を提供する。
 6. 子どもが参加できる取り組み・地域行事の運営に協力する。
 7. 特にない。
 8. その他
- 声かけ、見守り、運営協力、相談などを実施したいと回答した人はそれぞれ、310人、279人、137人、132人であった。一方で、「実施している人」は声かけが60人、見守りが23人、運営協力が38人、相談が23人であった。

実施している人は少ないが支援をしうに見守る。

市の子育て支援制度の利用状況

市の子育て支援制度を利用している世帯は図10のとおりでした。他方で、市の支援制度で預かりサービスを知らない人は46人、相談支援制度を知らない人が50人、家事支援制度を知らない人が75人であった。相談支援制度に関しては、他のサービスに比べて、友達に頼る割合が多かった。3種類のサービスでみると近所に頼る割合が少なかった。

家族にももちろん相談するが、同世代である同じ悩みを持つ友達の方が、近所よりも相談しやすいと思われる。

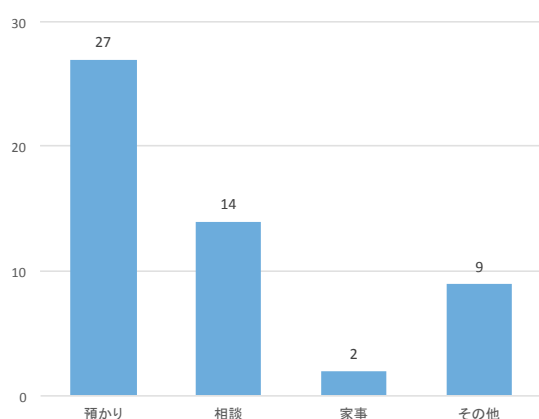


図10 各種子育て支援制度を利用している世帯数

市民と行政への提案

「ちょっとお願い」と言える地域のために

【市民への提案】

子どもの預かりについて、行政が行う保育、病児保育制度での預かりではない、「ちょっとお願い」できるような関わりが地域や近隣にあることが、市内に実家や家族がいない人や、近くに頼める友人がいない人にとって必要ではないかと考えます。

近隣で「子どもを預かって」と言える関係にある場合は少ないことが、アンケートの結果から分かりました。近隣でのこのような関係をつくるためには、お互いを知っている状況が必要で、区・自治会活動で、子育て世代を対象にした交流の場があれば、同世代の横のつながりができます。多世代が出会えるような機会を設けることで、世代を越えた縦のつながりを広げることができると考えます。

また、区・自治会では男性中心で役員が構成されていますが、女性も含め、子どもの活動をしている人、福祉

的な活動をしている人など、地域の多様な人が自治会活動に関わりを持つことができれば、幅広い世代が関われる取り組みができるのではないかと考えます。

さらに、会議の場では多様な世代、性別の人がお互いに意見を出しやすい雰囲気づくりも大事だと考えます。

【行政への提案】

行政より、母子手帳交付時に『高島市子育て応援ぶっく』（図1）が配布されます。しかし、交付以降のブックの活用や掲載内容についての声かけが少ないようです。

子育てに関する制度を知らない人を減らすためにも、『高島市子育て応援ぶっく』についての説明や声かけを、子どもの健診や子ども園・保育園などでさらに実施していただきたいと考えます。

子育てや子どものことを考え、話し合える地域に

子どもに声をかけると不審者と思われるような社会状況があり、個人での取り組みが難しい今日ですが、子どもの見守りや声かけを実践につなげるために、次のように提案します。

【市民への提案】

子どもへの声かけについては、区・自治会で周知して取り組むことで、実践できる人が増えるのではないかと考えます。例えば、高島市では夕方に子どもたちの帰宅を促すためにお帰りチャイム（童謡「夕焼け小焼け」）が鳴ります。「お帰りチャイムが鳴ったよ。家に帰りや」と声をかける取り組みを区・自治会で実践することで、地域の人が子どもに目を向ける機会になるのではと考えます。

また、安心して遊ばせられる環境を整えてほしいという要望もあることが分かりました。どのような遊びの場が求められているのか、具体的な内容について回答された子育て中の方に聞くことができる、地域での取り組みに活かしていただけるのではないかと思います。

以上のことから、区・自治会で子育て中の方達との対話の場を持つことで、子どもたちへの関心を広げていただきたいと考えます。

【行政への提案】

区・自治会によっては子育て世代への支援や子どもの活動について負担感があつたり、高齢化が進んでいる地域では子育て支援や、地域の支えあい活

動を行うことが難しくなっています。

そこで小学校区の範囲で子育て支援活動を行う組織づくりを提案します。このような組織があれば、区・自治会に入っていない人も、地域での関わりが少ない人も、ボランティアなどで参加しやすくなると考えます。区・自治会は世帯単位での関わりになります。が、小学校区の範囲での組織には個人で参加することができ、幅広い年代、多様な人々が子育て支援に関わりやすくなると考えます。

小学校区の範囲では、多様な人との関わりで、子どもを「ちよつと預けることができる」関係づくりの活動や、助け合える活動ができるのではないかと考えます。

また子どもを安心して遊ばせられる環境づくりについても、子育て世代と話をしながら、その子育て世代も関わって活動できるのではないかと考えます。

高島市では小学校区の範囲で支えあう地域組織が検討されています。その検討事項に子育て支援活動を行う部分も加えていただければ、いっそう実効性のある組織づくりに結びつくと考えます。

おわりに

―地域の声を聞く機会を

子育て世代にアンケート調査を実施し、この世代が地域に期待することや、地域に関われることなどが見えてきました。また少数でも、子どもの預かりや相談に関するニーズがあることも分かりました。

小学校区の範囲で、このようなアンケート調査が実施されることが大事だと考えます。どんなテーマで意識調査をするのか話し合い、考える機会も大事だと考えます。

今回、子育て世代の意識は集めることができましたが、区・自治会の役員や、地域で子育てを見守る方々にインタビューすることはできませんでした。

今後は、区・自治会の方々にアンケート結果をお知らせし、地域の中で、子どものことや子育て支援について話しあえる機会を持っていただけのように、市民と行政の双方で進めていくことが必要だと考えます。

提案①「ちょっとお願い」と言える地域のために

【市民への提案】

- 子育て世代を対象にした区・自治会活動で同世代の横のつながりと世代を越えた縦のつながりを広げる
- 女性・子どもの活動をしている人や福祉的な活動をしている人など、地域の多様な人が関わる自治会活動
- 多様な世代、性別の人がお互いに意見を出しやすい会議の雰囲気づくり

【行政への提案】

- 子育てに関する制度を周知するためにも、『高島市子育て応援ぶっく』配布時だけでなく、子どもの健診や子ども園・保育園などさまざまな機会に説明や声かけを実施

提案② 子育てや子どものことを考え、話し合える地域に

【市民への提案】

- 子どもへの声かけを区・自治会で取り組む。例えば、夕方にお帰りチャイムが鳴ったら声をかける
- 地域で安心して遊ばせられる環境について意見を集め、地域で取り組む
- 区・自治会で子育て中の人との対話の場を持ち、子どもたちへの関心を広げる

【行政への提案】

- 幅広い年代、多様な人々が参加できる小学校区で子育て支援活動を行う組織づくり
- 子育て世代との協働による安心して遊ばせられる環境づくり

提案③ 地域の声を聞く機会を

- 小学校区の範囲でアンケート調査の実施
- 区・自治会の役員や、地域で子育てを見守る方々の意識調査
- 地域の声を踏まえて、市民と行政の双方で子どものことや子育て支援について話し合える機会を持つ

活動テーマ

高島市で働く若い世代は何を求めるか

若い世代の多くが市外に出ていくことで、少子高齢化が加速的に進んでいるのが市の現状です。高島市に若者が残るためには、市内で働くことが重要です。高島市内で働く20代から30代の若者へのアンケート調査から、今の若者が理想とする働き方や暮らし方を考察します。

テーマの背景

平成27年度に実施された高校生対象のアンケート結果によると、市内の高校生の約半分が市外に出たいと考えていることがわかりました。

高校生や若者が一度は市外に出たいと考えることを好ましくはないとは思えません。市外に出ること、高島市での暮らしとの違いを実感した上で、子育てや結婚などを機に高島市に帰ってくるのが理想でしょう。市外に出た若者がいざれ安心して帰ってくるのできる環境が必要だと思います。

また、県内で開催されている就職フェアへの若者の参加が年々減少しています。企業が提示する就労条件と若者が求めている働き方に差があるのかもしれないと、私たちのグループは考えました。

活動目的

今の若者はどのような働き方や暮らし方を求めているのか。今働いている人は、どのようなことをきつかけにして高島市で働くことを選んだのか。それが分かれば、若者と市内の企業との意識の差を埋めることで、高島市で働く若者の増加につながるのではない

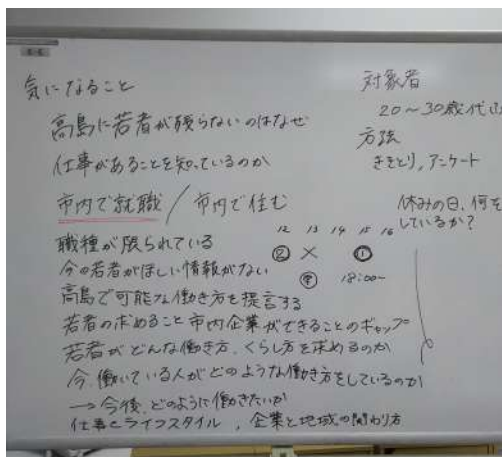


写真1 調査課題および方法の検討結果

かと考えました。

そこで、アンケート調査を通して、高島で働く若い世代（20、30歳代）が求めている働き方や暮らし方を見つけることにしました。そのために、まずは現在市内で働いている人の考えを知ることが必要だと考えました。

今回の調査が活気あふれる高島市のきっかけになればよいと思います。さらに、事業者や多くの人に調査結果を伝えることで、若い人がたくさんいる活気のある高島市をつくっていきたいと思います。

活動方法・スケジュール

① 6月〜12月

アンケートやインタビューの内容を検討しました。

② 12月27日〜1月9日

アンケートを配布しました。

③ 1月上旬

アンケートを回収、分析しました。

④ 1月下旬

分析結果から今後の高島市に何が必要なのかを考察しました。

アンケート調査について

アンケート作成にあたってポイントと考えたのは、若者が高島市で体験できる釣りやスキーなどのアウトドア

を、どのくらい求めているのかという点です。高島市で働く人は、休日のアウトドアを積極的理由として高島市を選んだのではないかと考えました。スキー場が近くにあり、琵琶湖も近いことを要因に選んでいるのではないかと予想しました。反対に消極的理由としては実家が近いからや何となくなどが考えられます。

その他の理由として子育てにも着目しました。子育ての項目の指標設定が難しかったのですが、今回は理想の子どもとの数としました。高島市の合計特殊出生率は1.4前後であることを踏まえて、理想の子どもの数は2人まで、または3人以上としました。



写真2 対象者にアンケート調査の内容を説明

〈アンケート調査の概要〉

対象者：市内で働く 20 代と 30 代

実施期間：平成 30 年 12 月 27 日から
平成 31 年 1 月 9 日まで

回収状況

配布枚数：80 枚

回収枚数：19 枚

回収率：23%

アンケートの配布

先の内容に合わせて年収、就業時間、福利厚生を加えた 5 項目を設定しました。年収は、高島市の平均年収である約 271 万円を参考に、300 万円程度から 100 万円単位で設定しました。

アンケートの実施期間は平成 30 年 12 月 27 日から平成 31 年 1 月 9 日まで、回収率は 23 パーセント（配布枚数 80 枚、回収枚数 19 枚）でした。アンケートの配布対象者は、グループメンバーの知り合いである市内で働く 20 代、30 代としました。メンバーの知り合いから選んだことで、結果に偏りが生じるかもしれないと。高島市全体の意見を保証するものではないということを付け加

えておきます。

分析方法

アンケート分析にはコンジョイント分析という手法を用いました。これはマーケティングによく使われる手法で、最適な商品コンセプトを決定するための多変量解析です。様々な組み合わせパターンから全体を評価し、個々の要素（今回は年収や就業時間などの 5 項目）の影響度合いを算出します。また、2、3 項目に絞って、それぞれの項目がどのように関連しているかを分析するクロス分析も合わせて行いました。

これらの分析により若者が何を重視しているかが推察できます。

アンケート結果の分析

―若者が重視するものは―

コンジョイント分析より、若者は年収を一番重視するという結果になりました（図 1）。この結果を当たり前だと感じるかもしれませんが、高島市に暮らしているからといって、アウトドアや子育てを最も重視するという結果にはなりません。重視する項目は、年収に続いて就業時間、福利厚生、子育て、アウトドアの順になりました。

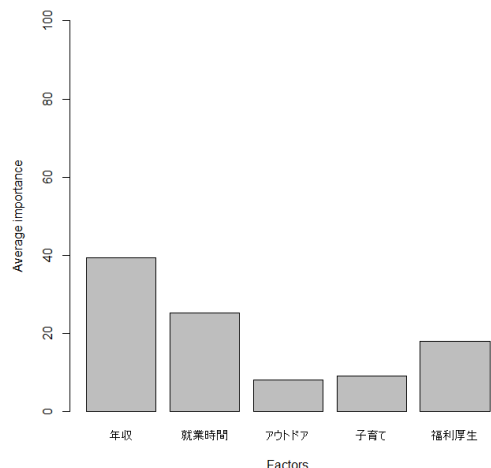


図 1 各就労条件に対する重要度比較

このことから、アウトドアだけを前面に押し出してアピールしても、多くの若者には響かないでしょう。アウトドアや子育てを望む若者を呼び込むには的を絞って行うことが必要になります。

次に各項目について検討します。

①年収

まず年収金額についてです。当たり前ではありますが、高い方がよいという評価になりました（図 2）。年収が 300 万円以下になるとマイナスの評価、400 万円以上だとプラスの評価になりました。年収 300 万円程度では、いくら福利厚生がよく就業時間が短くても若者には響かないと考えられます。

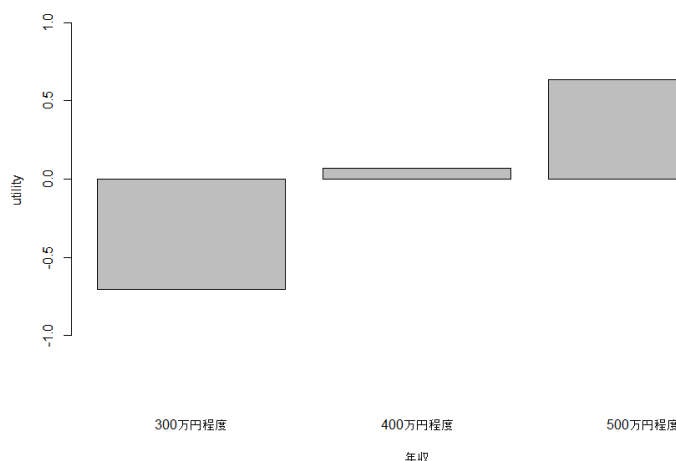


図 2 年収条件に対する重要度比較

②就業時間

就業時間に関しては、8 時間就業、短時間勤務をプラス評価し、8 時間以上で残業があるとマイナス評価になり

さらに、先でも述べたように市の平均年収は約 271 万円です。若者の希望する年収と差があるために市外へ出ていくと思われます。現実的に考えると、若者の理想が高いといえますが、少しでも理想と現実の差を埋める努力をする必要があります。

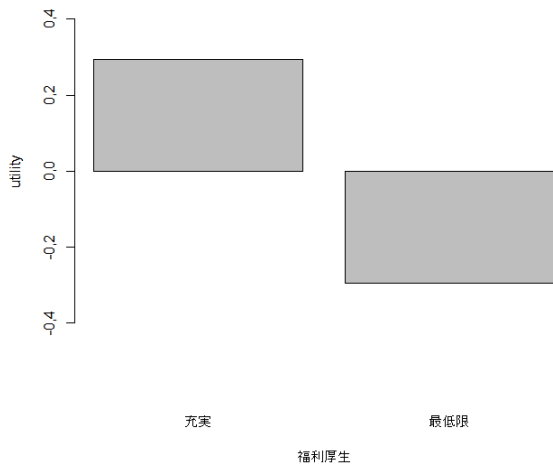


図3 福利厚生条件に対する重要度比較

ました。今回は、詳しく質問しませんでした。残業ありでも残業代の有無も気になるところです。年収についての結果を考えると、残業があれば残業代として年収に返ってこないと働きたくないと若者は思っているでしょう。

③ 福利厚生

福利厚生も当たり前かもしれませんが、充実した福利厚生がプラスの評価となりました(図3)。本アンケートでは福利厚生の内容を具体的に記述しませんでした。したがって、詳細な内容まではわかりません。よって、福利厚生の内容をより詳細にして調査することが今後の課題です。

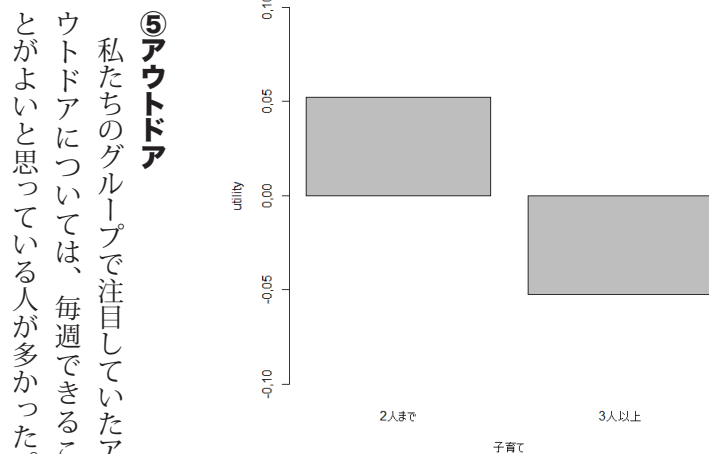


図4 子育て条件に対する重要度比較

④ 子育て

理想の子どもの数は2人までがプラス評価に、逆に3人以上はマイナス評価になっていました(図4)。理由まではわかりませんが、3人以上の子どもは負担になると感じている人が多いようです。このことから、いくら子育て環境や制度を整えても、子どもが多い(3人以上)方がよいと考えている人が少ないので、ニーズに合った制度を考える必要があると思います。

⑤ アウトドア

私たちのグループで注目していたアウトドアについては、毎週できるところがよいと思っている人が多かった。

子どもの有無による比較結果

クロス分析を用いて、現在子どもがいるかないかによって、先ほどの5項目の重要度が変わるかを見てみました。

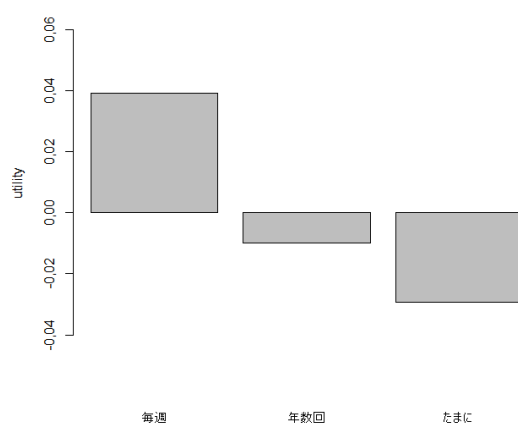


図5 アウトドア条件に対する重要度比較

せっかくアウトドアをするのなら、年数回でなく毎週できることがプラスの評価になります(図5)。また、毎週アウトドアをするなら、十分な休日や遊ぶお金などが必要になってきます。ここからも、もしアウトドアの観点から人を呼び込むのなら、毎週アウトドアをするような人を呼び込むほうが良いでしょう。

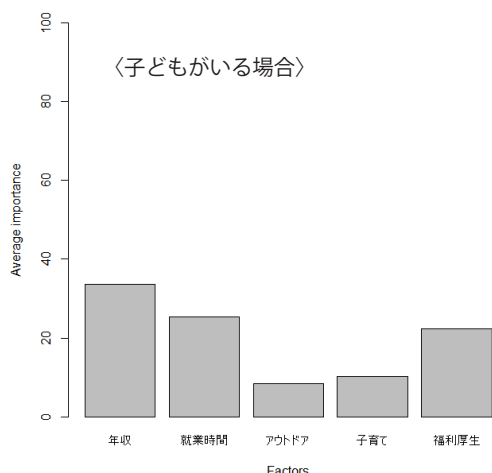


図7 子どもがいる回答者の各就労条件に対する重要度比較

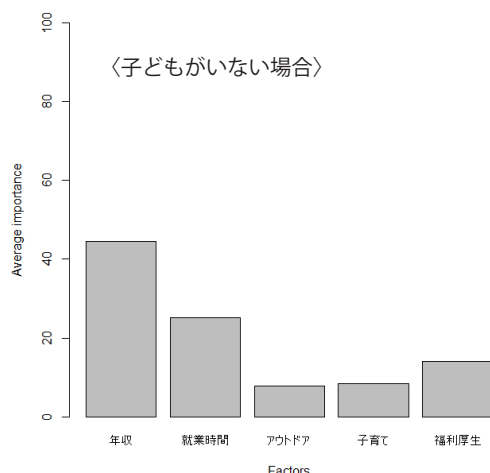


図6 子どもがいない回答者の各就労条件に対する重要度比較

子どもがいない場合

子どもがいない人は、全体的な結果と同じく年収を最も重要視していました。その次に就業時間、福利厚生、子育て、アウトドアと続いて同じ傾向を示しました(図6)。

個々の項目で見えてみると、年収も高

い方がプラスの評価になりました。しかし、年収300万円程度をより低く評価していました。就業時間は残業ありがマイナス評価になりました。福利厚生はやはり充実しているほうがプラスの評価でした。

子育てやアウトドアはアンケート回収数が少ないために統計的に言えませんが、全体と同じ傾向を示しました。

子どもがいる場合

子どもがいる人は全体の結果と比べると、就業時間と福利厚生がほぼ同じでした。年収が最も重要視されてはいるのですが、突出しているわけではありませんでした（図7）。

年収、福利厚生、子育て、アウトドアの項目は全体の結果と変わりませんでした。たまたま同じ傾向になったのかもしれない。

就業時間は短時間が重要視される結果になりました。子どもがいると子育てに割く時間が必要になるので、年収も重要視していますが、福利厚生や短時間での就業時間をより重視する結果となりました。

また、子どもがいない人の方が、子どもがいる人より年収を重要視していました。子どもがいると現実的な労働環境を評価し、子どもがいない人の方

が、理想的な労働環境を評価する傾向を示しました。

表1 子どもが「いる人」と「いない人」の比較

	年収	就業時間	福利厚生	子育て
いる	そこまで重視していない	短時間勤務を高く評価	子どもがいない人よりも重視する傾向	2人まで
いない	（子どもがいる人より）重視されている	残業ありをマイナス評価		2人まで

趣味による比較結果

スキーや釣りなどの高島らしいと考えられる趣味を、持っている人と持っていない人で比較しました。高島らしい趣味を持つ人ではアウトドアが重要視されると予想しましたが、全体の結果と同じ傾向を示しました。趣味のあるなしにかかわらず、若者が重要とするのは年収でした。

表2 高島らしい趣味が「ある人」と「ない人」の比較

	年収	就業時間	アウトドア	福利厚生	子育て
趣味あり	趣味なしほどは重視していない	8時間勤務 残業なしを高く評価	年数回程度を高く評価（現実的評価）	重視していない	3人以上を高く評価
趣味なし	500万円程度を重視	労働時間は短ければ良いと評価	毎週を高く評価（理想的評価）	重視していない	2人まで

今後のまちづくりへの提案

今回のグループ調査の結果から高島市で若者が暮らし・働くために次のことを提案します。

【市民・企業に向けて】

若者が市に残るためには、年収が重視されることから、若いときは少し高めの給与を設定し、婚活支援等の体制を充実させ、少しでも早めの結婚を促します。結婚・子育ての時期になると年収よりも福利厚生や就業時間を重視

するので、福利厚生の面を充実させ、給与等のコストを極力おさえてみてはいかがでしょうか。

【行政に向けて】

若者は3人以上の子どもがいることをマイナス評価と考えている面があります。2人までの子育て制度を手厚くしてみてもいかがでしょうか。また、アウトドアを全面的に押し出しても多くの若者には響いていないと思われる。アウトドアを売りにするとしてもピンポイントで売り出すほうが良いと思います。

まとめ

若者が年収を重視することはどうしても避けられない事実です。少しでも若者の理想と現実の差を埋める努力が必要です。

活動テーマ

子ども目線でつくる地域で学び育つ場

子どもたちが、いきいきといろんな体験ができる高島市。将来を生き抜くための知恵を持てる機会がある高島市であってほしいと、私たちのグループは考えました。そのためには、学校だけでなく、地域の暮らしの中に、子ども目線でつくられた居場所が必要だと考えます。

テーマの背景

少子高齢化が顕著に進む高島市において、大人たちは高島市の将来に漠然とした不安を抱えて日々過ごしているのではないだろうか。そして日本社会では以前にも増して子どもたちは大人たちの不安を払拭する希望の光として大きな存在となっています。

昨今、身近なところに危険が潜んでいる現代社会だからこそ、大人たちの「子どもを守らなければ」という思いが強くなってきました。しかし、一方で、子どもたちを大切に思うあまりの「大人たちのダメ」、つまり「大人目線の思い」が、逆に子どもたちが成長する過程で必要な失敗する、考える、挑戦する機会という「成長のチャンス」を奪う傾向になっていることもあるのではないかと、私たちのグループでは考えます。

また、学校だけでなく地域の暮らし



写真1 調査活動を検討するグループ会議

子どもに必要な場ってどんな場？

○1人じゃないと感じられる場

孤食が増えている現代で、みんなが楽しく食べられる場。地域のおっちゃん、おばちゃんが作ってくれたと感じられる食卓。

○子どもが本来持っている力を発揮できる場

子どもの自立性、創造性など、本来持っている力が自由に出せる場。基本的には大人は口出ししない場（今の子どもたちはケガをする前に危ないと止められることが多い。ケガをして気づくこともある。ケガもケンカも経験が少ないので力の加減ができない子が多い）。

の中で子どもたちの居場所を提供することも必要です。近年、市内でも「子ども食堂」の活動が始まっています。遊びなどを通して異なる世代とも交流して楽しそうにしています。そこに通っている子は、学年が変わっても「また来ていい？」と言って来てくれる。子どもたちには自分を認めてくれる場所、自分の存在が確かめられる場所が必要だと思います。

活動目的

私たちのグループでは、子どもたちが子ども時代をいきいき・のびのびと子どもらしく過ごすことのできる高島市、そして、いろいろな経験を得る機会に溢れた、たくさんの幸せを感じる

ことのできる高島市をつくらっていくことが必要だと考えました。そのために、子どもにとって必要な場である「子ども食堂」と「冒険遊び場」を調査し、市内で同様の場を増やすためのヒントを得ることを目的としました。

活動方法

市内の「子ども食堂」と「冒険遊び場」について、活動の自主性や主体性、地域との関わり、子どもにとってどのような場所であるか、運営者の思いや運営上の課題などを調査しました。平成30年8月から12月にかけて、活動場所訪問や電話で聞き取りを行いました。市内の「子ども食堂」と「冒険遊び場」の分布を図1、2に示します。

高島の〈子ども食堂〉

【構成メンバー】

地域住民福祉協議会、元教職員、地域のボランティア、各学区の小中学校、市社会福祉協議会など

【活動の思い】

- ・「気になる子どもに来てほしい」との思いから。
- ・子どもだけでなく、大人同士もつながれる地域づくりとして。

【活動内容】

- ・参加者は、10人程度の小規模から100人近い大規模まで。
- ・地域の畑で材料となる野菜を育てている。
- ・参加する子どもは、ほぼ小学生で、中学生の参加は少ない（一部の中学生がボランティアとして関わること

「遊べる・学べる淡海子ども食堂」は、地域ぐるみで子どもを大事にする垣根のない居場所として、ご飯を食べたり、宿題をしたり、本を読んだり、遊んだり等、子どもが安心してだれかとともに過ごすことができる場所を、地域の人々の思いと工夫でつくる事業です（滋賀の縁 創造実践センター）。

もある）。

- ・土曜日に実施のため、学童に通う児童も利用している。
- ・遊びの工夫をして、折り紙や飛行機などの、作った後で子どもが主体となって遊べるものをつくる。風鈴づくりなど大人も楽しめるものもつくる。

- ・季節の野菜などを使ったお菓子づくりやイベントを実施。
- ・イベント時は青年団が協力。
- ・運営していくために寄付を募っている。

- ・地域からはお米や野菜の寄付がある。

【よくあること】

- ・子ども同士のつながりができる。
- ・子どもが、親（保護者）以外の大人とのつながりができる。
- ・子ども食堂は、市社会福祉協議会がサポートしているので、協力者や協力団体とつながりやすい。また、スタッフを確保しやすい。

【課題】

- ・参加者が多く、スケジュールをこなすのに精いっぱい声もある。
- ・まだまだ「貧困対策」というイメージが強い。

表1 高島市内にある「子ども食堂」の活動概要

	名称	開催場所	スタッフ	開設日時	対象
1	縁と絆の百円食堂	鴨川平草の根ハウス（高島）	鴨川平区民有志	第3土曜日 12:00～	区民
2	わつなぎ食堂	永田区白崎邸（高島）	わつなぎの会メンバー	第4土曜日 10:30～15:00	中学生以下・高齢者・一人親家庭等
3	新旭子ども食堂	杉の木会館（新旭）	新旭住民福祉協議会・民生委員・ボランティア	第2土曜日 12:00～15:00	小中学生・幼児・地域住民等
4	安曇川ふれあい 子ども食堂	安曇川公民館（安曇川）	安曇川住民福祉ネットワーク・ボランティア等	第3土曜日 11:00～14:00	小中学生・幼児・地域住民等
5	セカンドホーム未来	あいあいタウン地域交流センター（今津）	市ヶ崎区・小中学校・民生委員・健康推進員等	第4土曜日 12:00～15:00	小中学生・幼児
6	新旭駅前ふれあい食堂	ショッピングセンターエスパ（新旭）	新旭駅前ふれあい食堂実行委員会メンバー	第4日曜日 12:00～15:00	小中学生・幼児・地域住民等
7	まちあかり子ども食堂	お休み処まちあかり（高島）	高島住民福祉ネットワーク、民生委員児童委員、子育て中のお母さん等	第3土曜日 11:30～13:30	勝野・鴨地域の子ども

・開催場所から遠い子どもの参加が難しい。
・「気になる子」が見えてきたが、その後の展開に悩んでいる。

図1 市内の「こども食堂」の分布



- ・青年層の人に関わってもらえたら子どもが喜ぶと思う。
- ・助成金がなくなる来年度以降の運営が心配。
- ・食事の提供になってしまい、子どもへの対応が十分できてない。
- ・スタッフ間で、意識（活動の目的等）の差ができています。

【次の展開】

- ・子ども食堂等を運営している人同士で交流したい。
- ・参加者の声を聞いてみたい。
- ・中学生の出席をつくらせたい。
- ・子ども食堂の運営会議や連絡協議会を設立していきたい。

高島の〈冒険遊び場〉

【構成メンバー】

子育て中の保護者、協力者

【活動の思いつき】

- ・ のびのびと思いきり遊ぶことで、子どもの生きる力を育みたい。
- ・ 自分の「やってみたいこと」を実現できる場として禁止事項はなし。ケガと弁当は自分持ちで。

【活動頻度】

- ・ 月1回、不定期など、団体によって異なる状況（表2を参照）

【活動内容】

- ・ 自然の中でいっぱい遊ぶ。
- ・ 端材を使って木工、たき火、焼き芋づくり
- ・ 関わる保護者のアイデア次第で、お店屋さん、英語、学習指導 等々

【もうひとつ】

- ・ 子どもが、子どもらしく自由に、自立して遊ぶことができる。
- ・ 子育て中の親の孤立や抱え込みがある中で、安心して親同士が話ができる。
- ・ 発達障がいの子を持つお母さんも安心して参加できる。

【課題】

- ・ 場所（トイレ、ちよこつと遊具のあ

冒険遊び場は、子どもが「遊び」をつくる遊び場です。そこでは火を使ったり、地面に穴を掘ったり、木に登ったり、何かものをつくったり…。落ち葉やどろんこや自然の素材を使って、遊び場にあるスコップや金づちや大鍋を使って、自分の「やってみたいと思うこと」を実現していく遊び場です。

さまざまな遊びが展開されていくので、変化しつづける遊び場ともいえます。禁止するのではなく、いっしょに考えてやってみる。

のびのびと思いきり遊べるこの場所は、子どもが生きる力を育むことを支えています。
（日本冒険遊び場づくり協会）

【次の展開】

- ・ 今後の展開を話し合う場を持つ
- ・ 場所の確保

- ・ 継続的な活動をするための相談場所があるといい。
- ・ 遠い子は来るのが難しい。
- ・ スタッフ（協力者）の確保（夏場の草刈り、湖の藻刈り等）
- ・ 人のつながりや情報の交換が少ない。
- ・ 新たな人材との出会いが少なくなる。

表2 高島市内にある「冒険遊び場」の活動概要

	名称	開催場所	参加人数	開催日時	対象
1	たかしま冒険遊び場	旧広瀬小学校グラウンド	10～20人	第4土曜日 10時～15時 (2019年4月から変更予定)	年齢制限なし
2	マキノらぼ	マキノ東小学校区内民家	20組程度	不定期	年齢制限なし

図2 市内の「冒険遊び場」の分布

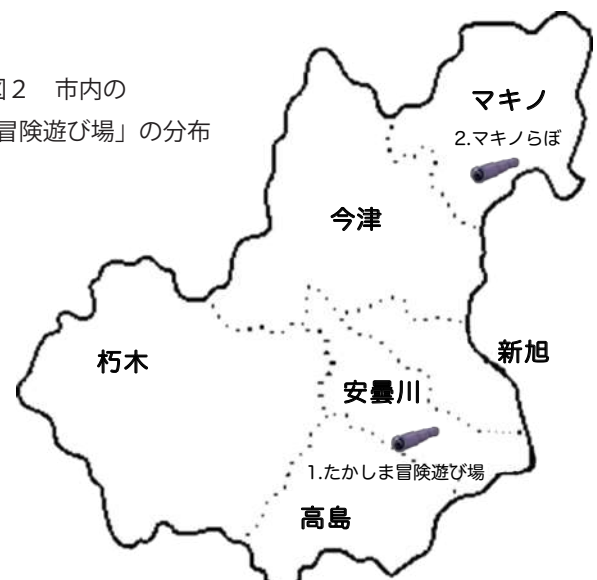


写真2 たき火で遊ぶ子どもたち

課題の考察と提案

私たちは、活動場所に出向いて様子を見学し、聞き取りを行い、活動されている団体の思いや、参加者が何を求めているかなど、現状把握に努めました。この調査の中で見えてきた様々な課題に対する考察をもとに、市民と行政へ提案をします。

●子ども食堂

「子どもに必要な場とは何なのか」、「その実現のために、スタッフとして何をどうすればよいのか」など、活動の課題をスタッフ全員で共有することが必要ではないかと考えました。

●冒険遊び場

課題を抱え込まず（活動者だけでなくとかしように思わず）、市社会福祉協議会のボランティアセンターなどにヘルプを発信することが必要ではないかと考えました。

また、継続的に利用できる活動場所が必要です。例えば、広いスペースやトイレ、遊具がある学校のグラウンドや子ども園の園庭が理想的な場所ではないでしょうか。

●子ども食堂・冒険遊び場の共通課題

・助成金がなくなる来年度以降の運営のために、他の補助金・補助制度の活用を考えました。

・子ども食堂も冒険遊び場も活動場所までの距離が遠いという課題があるので、子どもたちの生活圏内に子ども食堂や冒険遊び場があるとよい。

・地域学校協働活動で配置されている地域コーディネーターに活動の大切さなどを理解してもらうことで、冒険遊び場にとっては、活動場所の提供につながる可能性があります。子ども食堂と学校で、子どもの様子をお互いに共有することもできます。

・活動の理解者を増やし、スタッフとして関わる人を増やしていくために、学校や既存の活動団体のほか、協力者の趣味や特技を生かせる「具体的で多様な依頼や募集」を発信していくことが必要だと考えました。また、活動を理解し、協力してもらうために、地域の事業者に対しても発信することが必要です。さらに、運営側だけでなく、参加者の声などを発信していくことも、実際の活動の雰囲気伝えることで、「子ども食堂」「貧困対策」や「冒険遊び場」「ケガへの対応が不十分」といった思い込みを解くのに効果があるのでは

ないかと考えます。

【市民への提案】

子どもや高齢者の孤食が増えている高島市の現状の中で、一人でも多くの方が活動にかかわることにより、子どもたちは地域で生きているということを実感できます。

まだまだ実施されていない地域もあることから、活動の広がりを期待します。

【事業者への提案】

将来、地域を支える子どもたちのために、子どもを成長させる活動に理解を示し、子どもの活動に対する資金の支援や物品の提供などを通じて協力することができそうです。

【行政への提案】

これらの活動実態を把握し、課題を共有し、活動を行っている人やこれから活動を行うおうと考えている人を後押しする取り組みを期待します。

例えば、課題の一つになっている冒険遊び場に使用する場合の確保について、学校や保育園などの公共施設を柔軟に使用できる仕組みづくりや、活動団体等と地域、事業者との連携につながる取り組みに期待します。

おわりに

私たちが見てきた「子ども目線の学び育つ場」とは、家族や学校以外のゆるい関わりやつながりがあり、子どもにとって、「そこへ行けば受け入れてもらえる安心感」や、「新しい遊びや体験の機会」が得られる場となっていると思います。また、「助け合い、つながりあう大人の姿」が子どもにとってモデルになっていると感じました。



写真3 リヤカーで走り回る子どもたち

活動テーマ

高島の伝統文化「神社とお祭り」を

活かすまちづくり

私たち文化グループでは、「自然、人、伝統文化、つながり」など、高島市が本来持っている資源を最大限に活かす「自然共生型社会」を目指して、「高島の伝統文化を活かす」ためのまちづくりとして「神社とお祭り」を選択しました。

「お祭り」と日本人

お祭りとは、人々の住む里に神様を御神輿おみこしや曳山ひきやまに迎え入れて、もてなし、先祖を敬い、里人の幸福を祈る年中行事といえます。

日本の信仰（宗教）といえば大別して神道と仏教といえますが、お寺でも「お祭り」は無くはないが、やはり「お祭り」は神社のものと何となく思っています。これはどうしてでしょう。

仏教は創始者お釈迦さまの教義（経典）によって成り立ち、禅ならば禅の、浄土真宗なら浄土三部経という經典や親鸞という人の説に拠った、そういった普遍的な教義を中心に据えています。

ところが「神道は何か」と聞かれても、たいていの人は答え難いのではあ

りませんか。神様（ご神体）は八百万やおよろずの神といわれるように、日本の山や川や里など風土の全てに宿り、故郷で活躍された人々が祀られており、まさに千差万別、一社一社によって異なります。ご神饌しんせんという神様の食べ物も神社によってそれぞれであり、お祭りの日にも決まっていない。これほど個人的で個別的なお祭りは世界に比類が無いと言われています。

氏神様と守護神を敬う「お祭り」

個別的ではあっても神様は二種類あります。一つは「氏神様（産土神）うぶすながみ」で、親子孫、親族、血縁など、地縁共同体として祀られている神社です。二つ目は血縁を超えた「守護神（怨霊神）」。「天神さん」と親しまれる各地の天神

社は太宰府に左遷された菅原道真公のように、殺されたり、恨みをもって死んだ人達が祟たたらないように祀られています。

「祭る」ことによって氏神様は一層子孫を守り、怨霊神も祟りを止めて守護神になるとして、日本人はお祭りを大事にしてきました。こうして神様に感謝と祈りを捧げる「お祭り」は遙か古代から継承されてきました。

「厳かな神事（儀礼）」と「賑やかな祝祭」

祖先や神様に喜んでもらうには神前で参拝するだけではなく、人間も楽しいことをやろう、ということ、鎌倉・江戸と時代が下るにつれて厳肅な「神事（儀礼）」と共に、勇壮な御神輿おみこしや曳山などが登場する「祝祭」とが合体して、地域が賑わう現在の「お祭り」が創出されてきたのです。

「歴史を彩るお祭り」

注目が高まる高島市の神社

歴史、特に古代史の研究において、「神社」は「生き証人」であり、「神社の名称」、「ご祭神」、「存在地」は立証や論証の核になってきました。

昭和六十二年編『滋賀県神社誌』には「高島郡一三五社」が町村別に一社一社克明に記載されています。

マキノ一七社 安曇川二八社
今津 三八社 高島 一九社
朽木 一六社 新旭 一七社

古代史研究から、近年、滋賀県、中でも高島市が注目されるようになっていますが、それは「御祭神」に神話の世界に登場する神様たちが多数祀られている由緒にあります。

人皇初代神武天皇の即位（BC六六〇年）までに神代（古語ではカミノヨ）として十二代の神様（古語ではカミ）が即位され、今日の官僚といふべき人臣（トミ）とともにまつりごとをされたとする縄文時代五〇〇〇余年の、超古代とされる時代の資料が発見され研究が深まっています。高島の神社の御祭神には、例えば、イザナギ・イザナミ、ニギネ、アマテラスオオミカミ、ソサノヲ、オオヤマスミの神々など、神話で大活躍されている神社が多いのです。

これら古い神々の故地・琵琶湖周辺でも、特に西岸には所在地が確定される神社が多く、古代史研究にとっては垂涎の地域であるといわれ、愛好家が訪れていると聞きます。

地域を結ぶ「伝統文化」の継承のために

神社は地域の延々たる「過去」であ



マキノ町 海津力士祭り（海津・西浜合同祭）



新旭町 七川祭



高島 大溝祭

り歴史の証人です。そしてお祭りは「現在」ここに暮らす人たちのエネルギー（産業、技術）やパワー（経済、行動、瞬発力）などの表現であり、それらと人のつながりが「伝統文化」となって地域を結んできました。

「自然」に恵まれた高島市が本来持っている「人」と「つながり」、神社とお祭りという「伝統文化」は私達の大

切な資源であり、資本でありましょう。ここから子や孫に継承すべき「未来」が見えてくるのではないのでしょうか。

お祭り関係者へのインタビュー

そこで現在「神社とお祭り」がどのように維持管理され、運営されているのか、そして何よりもお祭りを支える関係者の思いを直接にお聞きしたい、

と私たち「文化グループ」は、高島市の代表的な祭りとしてされるマキノ町の「海津力士祭り（海津・西浜合同祭）」と、新旭町の「七川祭」と、高島の「大溝祭」を取材させていただきました。

取材の柱には「高島市の文化として、祭りを継承していくための課題と工夫など」としました。人口密度が高く観光客が大勢集まる祇園祭や岸和田

祭などの「都市のお祭り」とは異なり、小規模で少子化が直に反映するようになった「地域のお祭り」は、維持する為の難しささまざまな苦労が浮かび上がってきました。

今回の試みが、廃止にしたり縮小になっている地域のお祭りや「祭り関係者」にとっても、参考になればと願っています。

海津力士祭り（海津・西浜合同祭）

海津天神社 マキノ町海津一二五三―二

化粧まわし姿の若衆神輿が港町を練り歩く

海津はかつて琵琶湖の水運の拠点として、また西近江路の宿場として栄えました。学問の神様で知られる海津天神社は海津・西浜の郷境に位置しており、菅原道真公を祀る本社のほか、両地区の氏神である大鍬神社・小野神社はじめ十数社が座しています。

かつては海津・西浜それぞれ独自の祭りとして執り行われていましたが、昭和三十年頃より合同祭となったもので、「海津力士祭り」と親しまれる海津天神社の春の例大祭です。

アンサンブル姿で

宵宮参りする若衆たち

大祭は四月二十九日（祝日）、前日には午前十一時より礼服・白ネクタイ姿の海津・西浜の正副総代が参集して大祓いを受け、社務所にて神職が斉行する直会（二十六頁三段目に説明）が開かれます。

夕刻十九時には正総代と神輿を担ぐ海津の青年会と西浜の農友会の若者達がアンサンブル姿で太鼓をたたきながら参宮して、大祓いを受け（宵宮参り）ます。

神輿をかく（担ぐ。地元の祭り関係者は神輿をかくとか、神輿かきと言われます）のは十八歳から三十五歳まで

の未既婚間わない若者達三十五人で、アンサンブルはお祭り初参加の年に自前で揃えたものなのです。

先行するのは稚児行列と子供神輿

大祭当日は十時過ぎお祭り関係者が参集される中、祇園社では御神饌を決める籤取りが行われ、午前十一時には祇園社から、小さな三〜七歳の女の子たちの稚児行列が、海津天神社に向けて出発します。同行するのは先頭の金棒引きに続き、稚児、鳶持ちの女性、ミゴキ台を担ぐ男性による三人一組と、総代合わせて十五組が続きます。御神饌台には一番から十五番までの番号札が付いていて、それぞれに魚

海草、野菜、果実、御神酒、御供（白蒸し）などが色鮮やかに盛られています。天神社では境内社を含め、それぞれ番号に従って社殿に備えられます。次いで十三時半には小学四・五・六年生の男女約四〜五十人による子供神輿一基が海津天神社を出発、十五時頃還御します。

神輿渡御の道を清める大櫛

社務所前には二基の大櫛が並んでいます。オサとは御幣をつけた櫛を立てた木製神輿で、神輿渡御に先行して参道を清める意味があります。

十二時半、オサ二基が天神社を出発すると、これを合図に化粧まわしにハッピ、鉢巻き姿に身を飾った若者達が順次参宮して、社務所内にて御供（円錐形のご飯に笹ではちまきしたもの）と御神酒をいただきます。

豪華な化粧まわしの起源

十四時半、化粧まわしを締めた担ぎ手三十五人程が神輿（二基に分かれて、いよいよ海津天神社を出発し、それぞれ海津と西浜の集落内を練り歩きます）。

通称、力士祭りと言われるのは、江戸時代、回船問屋の荷役の若衆たちが、天神社境内での草相撲で力士を真似て



総代が参集して御神饌をいただく

豪華な化粧まわしをつけて、その強力を競いあつたのが起源といわれます。当時の分限者たちがしつらえた豪華な化粧まわしのいくつかは「横綱まわし」として代々家々に伝えられ、そのまわしを借用したり、さらに神輿かきに選ばれた若衆たちは、自分好みの刺繍を京都の織物屋であつらえて、祭りを支える中老（三十五〜六十一歳）や役員となっても、大切な家族自慢の一つとなっています。回船問屋で栄えた港町、宿場男の気概が、今もなお、力士祭りのまわし姿に息づいています。



町中を練り歩く化粧まわし姿の若衆神輿

練りあった二基が 寄り添って天神社へ還御

四、五年前は、それぞれの地区を練り歩いた若衆神輿は十六時に集落の庄境（ショウザカイ）で落ち合って休憩、十七時半から再びそれぞれの集落内を練り歩いた後、再度ショウザカイで落ち合って、二十時頃に天神社へと進みました。

大勢の観衆とかがり火に照らされ

辺りはすでに暗く、天神社の参道にはかがり火がこうこうと焚かれ、神輿還御を待つ大勢の観衆が待ち構えています。

神輿は荒々しく拝殿の周囲を数回練られ、興奮と歓声の中、石段を登り、本殿の前に並べられます。

神職による遷霊の神事後、神輿を本殿に見送って、神輿蔵に納めて祭りは終了します。すでに二十時です。

翌日は「御名残（御縁）」

三十日の昼からは「御名残」。長襦袢の裏に刺繍を施した踊り襦袢姿の若衆がタスキかけで太鼓を叩き、その歳に新築や婚礼など慶事があった家を訪ねます。慶びのお裾分けです。

関係者の声

故郷の伝統文化といえば「お祭り」ではないでしょうか。とはいえお祭りを維持管理・運営するには大変な祭費とエネルギーが必要となります。

そこで、海津力士祭りに尽力された三十年代総代のお二人に「祭りを継承していくための課題と工夫」などを伺いました。

年で工夫、改革される祭

総代さんが二十歳の頃、昭和五十年前後には神輿を人力ではなく、車に乗せて曳いていたとか。

かつては四月二十二日が祭礼日で、

現行の四月二十九日になったのは平成七年。

神輿はかつて天神社二基、大鍬神社一基、小野神社一基、計四基でしたが、現行の神輿渡御は二基となっています。

祭りを維持するためにいつの時代も努力や工夫をされていて、伝統行事といってもその時代時代で変化のための改革がなされていました。



海津三町総代・中川一夫さん（左）と海津西浜四町総代・西村寿男さん（右）

祭りに帰郷してくる仲間たち

「みんな祭りを続けたい、継承していきたい」と思っているけれど、問題は担ぎ手不足なこと、少子化で子どもが少ないこと、昔は希望する子どもたちが多くて出られない子がいたんですよ」。

「台風で壊れた神輿蔵の修繕やら、増大する祭費をどのように維持していくのか、難しいことが多くてね」。

「祭りになると毎年帰ってきて、祭りに参加してくれる仲間達が結構いるのが、ありがたいねえ」。

祭りの絆が災害復旧に生きる

平成三十年秋、海津は二十一号台風により電信柱九本が倒壊して、電気不通の日が五日余り続きました。「祭り仲間には年齢や立場の上下を超えて、平常時には気づかない仲間意識が築かれている。お互い様と助け合える地域のありがたさを改めて感じました」。

なくてはならない祭りの力

「神輿が近づく」と地区の有線放送で知らせます。町内の人たちが家の外に出て応援して下さる。それで元気になつて疲れが取れる。祭りをやる人も観る人たちも、皆が楽しめる祭りの力はすごいですねえ」。

七川祭 大荒比古神社 新旭町安井川八四四

戦勝祈願と七川の安全を祈る湖西随一の馬祭

毎年五月四日に行われる七川祭は湖西随一の馬祭と言われ、昔から大祭として大勢の見物客を集めています。人気の「馬駆け」は三基の的を射抜く流鏑馬と役馬競馬。「的練り」として親しまれる奴振りも県選抜無形民俗文化財です。

七川祭の始まりは鎌倉時代とされ、近江高島田中庄を与えられた佐々木高信（後の高島氏）一族は出陣の際には大荒比古神社に武運を祈願し、戦勝時には神社に十二頭の流鏑馬と十二基の的を献納したとの由緒が伝わっています。

八地区の氏子衆が毎年当番制で渡し番に

神社とお祭りの管理運営は「氏子総代会十二名と氏子青年会七名」で組織され、祭は旧八ヶ村（新旭町の井ノ口「宮元」、安養寺、川原市、北畑、新庄、平井、堀川、安曇川町の十八川）の各地区が八年に一度、当番制で渡し番となります。

祭りの準備には「流鏑馬（二頭）・



素走り、役馬（七頭）の乗り手」「警護」「唐丁持ち」「的練りを奉納する奴」「傘鉾、太鼓、鉦」などがあり、当番が回ってきたときは年始より祭りの準備に取り掛かり、大忙しです。そして翌年からは八年後のお祭り費用として二〇三〇〇万円の積立金が始まります。

お祭り当日の見所

四日当日は朝、各地から警護・唐丁持ち、的練り奴、傘鉾、太鼓・鉦・役馬の行列が的練りを披露しながら集合地に向かい、行列して神社の馬場に姿を現すのは正午過ぎになります。この頃には見物客も増えて、三つの的を立てられた馬場（参道）に作られた棧

敷（有料）も賑わってきます。

いよいよ神社馬場での行事

まず、揃いの紫色の半纏と背中には佐々木家の「四ツ目」家紋を付け、各地域から選ばれた十四名の「奴振り」の登場です。3mの青竹の先に六十cm四方の四角い板を差し込んだ「的」を持ち歩く「的練り」十二名と、天狗とお多福のお面を御幣に取り付けた飾り樽を持ち歩く「樽振り」二名が、一ヶ月間の厳しい指導と訓練に耐え、見事な練ぶりを披露して、大勢の観客から拍手と歓声が上がります。

神様と絆を結ぶ「ご神饌と直会」

神様にお供えしたご神饌のお下がりを頂く直会は、神と人を、また共に集う人々との連帯感や仲間意識を高める儀礼として尊ばれてきました。七川祭では「神御供の式」と呼ばれ、祭り関係者や地域の代表者が集います。

ご神饌はへぎの台に載せられた「赤飯（盛槽で形を整えられ、檜の葉の上に載せる）」「生ふき二本」「干鮎二尾」です。

稲作社会の素朴な海・山・里の幸を「神人共食」する日本の「まつり」の本質が現在まで継続されています。

祭のクライマックスへ

式が終ると、きらびやかな馬具で飾られた流鏑馬と役馬が神前に拝礼する宮参りへ。

露払いは「素走り」。次いで流鏑馬が神前に「扇の手」を奉納して、三つの的に矢を放ちながら駆け上がっていきます。最後は八頭の馬による役馬の競馬と続き、クライマックスです。

「的練り」と「神輿の渡御」

「的」の代わりに「扇」を持った奴が最後の練りとして神前に奉納。最後が「神輿の渡御」。この神輿を神輿庫に納めるところで七川祭は終わりを迎えます。

馬耕地域だった名残を残す馬祭

湖西地域は牛馬による農耕が盛んで、農家が飼育していた馬は氏神例祭の駆馬として流鏑馬の神事に奉納され、盛んな頃には一〇〇頭以上の馬が出たという大祭でした。

五年前より騎手を神奈川の小笠原流の家元に依頼され、馬は京都太秦の乗馬センターから流鏑馬二頭、競馬・素走りに七頭を借用するという創意工夫と改革がはじまり、スムーズな運営がなされています。



神社は「歴史の生き証人」

「神社」は地域の歴史の生き証人であり、「神社の名称」「ご祭神」「存在地」はその核になっています。

大荒比古神社は大きく荒れる男（比古）神という社名のおり、安曇川の河内にある「産土神」として祀られ、安曇川の氾濫を鎮め、水源の七つの川の用水路を護る氏神様に、感謝と祈りを捧げる神社として現在に継承されてきたことから、一時「河内大明神」と称されたことがあります。

関係者の声

ここで取材させていただいた氏子総代会会長の桑原勇さんに登場いただきます。

現在の我々の幸福

「今日の時代の変化であると言ってしまうえば、それで終わりかもしれないが、ややもすると流行が先行して、文化伝統を永きにわたり受け継ぐことの意識が薄れてきたのが残念ですね。

文化伝統を護ってきたことが現在の我々の幸福につながっていると感じなければならぬと思いますよ」。

八年かけて祭を護っている氏子衆

「祭りには資金と人の確保に大きな苦勞がありますから、永年かけてみんなで知恵を出し合って運営組織を築き挙げてきたわけです。

当神社には五十年近い歴史を持つ氏子青年会という四十歳までの若い男女の頼もしい組織がありますが、少子化や若者の市外への転出等もあり、会員数が激減しています。継続は力なりといいますが、氏子の皆さんの物心両面の支援とご協力の賜物ですね」。

若者たちの練習

「何といつても子どもが少なくなつて、他地区へ参加をお願いしたり。練習も塾とかクラブとか子どもたちも忙しくて、練習が終るとみんなを焼き肉を食べに連れて行くとか、心配りをしています」。

天気と事故が一番の心配

「晴天に恵まれる事、事故のない事、一番の気掛かりですよ。大勢詰め掛けてくださった観客から大きな歓声と拍手が沸くと嬉しいねえ」。

伝統文化が果たしてきた役割とは

次いで大荒比古神社宮司・城戸重臣さんも快く取材に応じてくださいました。

「神社は個人を大切にしながらも、家、地域社会、民族、国家の繁栄と安寧を主とした願いとして、祭祀のときを定め、繰り返し行いながら、人々の安らかな交わりや地域社会を守っています」。

お祭りは厳粛な儀礼と賑やかな祝祭とが相まって、心の拠り所として伝統文化が果たしてきた社会的な役割を考える機会となっているようです」。

消滅の危機が訪れたら

「私は思うのですが、八〇〇年余りの七川祭の歴史の中では、飢饉や災害等で消滅や解散の危機が訪れた時代があったことでしょう。でも、『規模が縮小してもお祭りを無しにしない』『地域』の歴史を変えない』と、踏ん張ってくれた人々が居たおかげで七川祭は今年も継続しているのですから」。

「奴振り」の練習は体育館！

奴姿で三mの青竹を左肩手に持って練り歩く「的練り」は、中学生から三十歳までの男性が主役の人気の出し



氏子総代会会長 桑原勇さん



大荒比古神社宮司 城戸重臣さん

でも「奴さんたちから、『やって良かった』と聞きますからねえ」と城戸宮司さんはニツコリされました。

でも「奴さんたちから、『やって良かった』と聞きますからねえ」と城戸宮司さんはニツコリされました。

大溝祭 日吉神社 高島市勝野二二六六

町衆の経済力や文化、創意が詰まったお祭り

旧高島町は江戸開府（1608年）から間もなくの1619年、伊勢国上野藩から家臣四十五名と領民と共に入封した分部光信が開藩し、以後明治四年まで江戸時代250余年間を分部家十二代に亘る藩政によって栄えた城下町です。

湖西唯一の曳山を誇る大溝祭は、勝野の日吉神社大祭として、城下町形成と共に整えられました。分部藩開府以前から集落が祭っていた「神事」に、財をなした町人衆が取り入れた曳山五基が加わり、その後、曳山は毎年のように華麗に彩られ、更に囃子や人形飾り、曳山の上では「芸」や「浄瑠璃」の上演等が披露され、時代に応じて賑やかに「祝祭」の趣向が凝らされてきました（県選択無形民俗文化財）。

こうして町衆の経済力や文化、創意などが詰まった年中行事として継承されてきた大溝祭は、いよいよ本年、四百周年の節目を迎えました。

お祭りを支える五組とその組織

「表1」のように、曳山五組を持つ地区は町名で二十、運営は七地区。自治組織として再編成され、さらに連合して五つの組に分かれています。

毎年五組のトリを勤める渡し番から宰領が選出され、神輿舁き人の最高責任者となります。各組には祭礼を運営する組織があり、中でも若衆とそれを終えた中老が曳行には大きな役割を果たしています。

日吉神社の山の手と石垣の両地区は宮元と呼ばれ、神事には「諸人」として参加。この役割は渡御の供奉、神域の整備、神輿出し、など。さらに近年、萩の浜地区が開発され、祭りにはこども神輿が参加しています。

お祭りの見所

毎年、五月三日に宵宮祭、四日に本祭が繰り広げられます。その見所を写真と共にご紹介しましょう。



日吉神社では三日の正午より神事が始められ、十三時頃に終了。夕方十八時からの神事には氏子総代などが出席、終了後の十九時からいよいよ曳山の巡行、大溝漁港へと向います。

提灯が点火された曳山が内湖の乙女ヶ池にかかると、水面にゆれる提灯の灯りが幻想的で美しく、「大溝の水辺景観」を表象しているようです。

四日は「本祭」。日吉神社で九時より神事がはじまり、宮元衆と稚児は袴姿で着座。終了すると一同は階段を降り社務所へと向う。

各組から選ばれた神輿かき全員にご神饌が配られ、日吉神社ではお神酒、赤飯、エビやジャコの煮物、氷魚など。柿にのったご饌米は

石段下の祭場に置かれた神輿に宮司による神霊移し、11時半頃、馬場にて勇壮な3回練りまわった後、車に乗せられて神輿は地域を巡行。夕刻、一旦社務所前に置かれた神輿に神霊移しが行われ、山蔵に収められます。

懐紙に包んで持ち帰られています。

その後、鳥居前で万歳三唱。さらに本殿前にてハイライトの一つ、神輿の「天井かき」が行われます。

五基の曳山は十時までに「総門」前に勢ぞろいする。先頭には袴姿の二人が先導し、引き手は浴衣姿。本町通りから「総門」へ向う。

五基の順路は一番前が「花山」、最後が「渡し番」。翌年は渡し番が花山となり、以下一つずつ順番がずれていく決まりです。

「総門」は大溝陣屋で唯一現存する貴重な建造物で、分部氏による水割り水路は城下町の町割り整備によってつくられた飲用・防火用の生活水路で、

表1 お祭りを支える運営組織

港組	勝野		勝野	勝野町
			長刀町	六軒町
巴組	本町	南本町	南本町	
		蠟燭町	職人町	
宝組	北本町	中本町	紺屋町	
		北本町	新庄本町	
勇組	新町	東本町	今市本町	
		三組	紺屋町	
龍組	中西西町	二組	喜呂	
		一組	今市新町	
龍組	中西西町	中町	新庄新町	
		西町	今市中町	
龍組	中西西町	上中町	新庄中町	
		下中町	南市中町	
龍組	中西西町	西町	十四軒屋	
		西町	西町	
龍組	中西西町	伊勢町	伊勢町	
		伊勢町	伊勢町	

旧町割と現在の町自治組織(平成25年巡行計画図より)



3日の宵宮祭では各町内から出発する5基の曳山が、金箔や漆塗りされ、豪華な天幕と胴幕、見送り幕で飾られて、古式にのっとった笛、太鼓、鐘が祭囃子を奏でて巡行します。

水の豊かな高島ならではの町づくりの面影が残っています。

大溝祭「四百年目を飾る事業」

昔の賑わいを取り戻し、伝統文化の継承をテーマとする、計画中の記念事業の一部を紹介しましょう。

・特別さじぎ席の設置

華麗な五基の曳山が勢ぞろいする総門前と日吉神社に設置。豪華な曳山の魅力と共に勇壮な曳き手の舵さばきを楽しみましょう。

・お城バルーンと交流広場が登場

甲賀市水口町に伝わる大溝城の天主解体部材が転用されている「水口岡山城」の巨大バルーン（高さ11m）を囲み、休憩や食事を楽しむ交流広場が登場、宵宮にはライトアップも。高島ならではのお酒や和菓子、限定の手ぬ

ぐいや木ふだ、曳き手ボランティア用の法被の作成等。

・曳き手ボランティアの募集

四百年の歴史を思い、お祭りを体感できる曳山巡行に参加しませんか。

関係者の声

取材した大溝水辺景観まちづくり協議会代表の今西仁さんは、永年お祭りの維持運営はもちろんのこと、まちづくりにも尽力され、補足取材も含め長時間をご協力いただきました。

「お祭りがあるから町内はバラバラにならない」

「お祭りは苦労ばかり、だけど三日前くらいになると何故か熱くなってくるんだなあ（笑）」。

「人が少なくなった。若者も子ども達も」

地域の人達の祭りへの馴染みは、子どもから青年期にかけて祭りに関わったその人の時間に左右しているようです。さらに移住された家族がここが故郷と言えるには子や孫が育つ何十年先となる。少子化となって地域と人を繋ぐ「お祭り」の継続も、子ども達と若者の参加なくしては難しくなっています。子ども達もまた遊びの多様化や

塾やら、拘束時間が多い。さらに高校卒業後の若者達の姿を休日すら市内で見られることは稀であるという現実があります。市外に住む息子や娘たち家族が帰ってきて、昔取った杵柄とお祭りに参加して、旧交を温めているとも聞きました。

何といつてもご苦勞されているのは、お祭り年齢の高齢化と参加者の減少、子ども達の練習時間が取れないなど、これに尽きるようです。

「お井当みやげとアイスクリーム」

神事を起源とするお祭りには、女人禁制とされる祭事が多い。お囃子、笛吹き、神輿かき等に、女子を採用するという工夫が進んでいます。ボランティア募集もヒットアイデアでした。

一日中笛吹いて飽きることがなかった「祭キチ」

「祭り自慢と言つてもねえ」と、また「ええかげんな話やけど」と何度も口にされた今西さん。ありがとうございます。

調査から見えてきたのは

まちづくりにおいて、「お祭り」は経済を潤し、人々の交流を深めるなど文化的な資本と考えられています。そればかりかお祭りはお互いの信頼や協力によって成り立っていますから、お祭りで賑わうコミュニティは他人への警戒心が少なく、「経済」はもちろん、「治安」「教育」「健康」「災害時の復旧」「幸福感」などに素晴らしい影響を与えていました。まさに社会的な資本をも熟成していたのです。

子どもも若者も壮年も高齢者も、地域の全ての人々を癒し、感動を与えて、未来のコミュニティを支える人材を育てるお祭りを、地域や故郷の誇りとして、継承していきたいものです。



大溝水辺景観まちづくり協議会代表・今西仁さん

【参考資料】

1. 「二つの持続可能社会の姿」どちらを選ぶ？」滋賀県琵琶湖環境科学研究センター総合解析室編『都市祭礼文化の継承と変容を考える』山田浩之編（ミネルヴァ書房）
2. 『知多の山車祭り』（梅原猛 講演より）
3. 『秀真伝講解』馬野周二（周真会）
4. 『食べ伝えよう滋賀の食材』滋賀の食文化研究会（サンライズ出版）
5. 『マキノ町誌』マキノ町誌編さん委員会（マキノ町）
6. 『滋賀県の祭礼行事』文化財保護課編（滋賀県教育委員会）
7. 『滋賀の祭り』と伝統行事100選』滋賀銀行業務推進部編（しがぎん健康友の会・しがぎんみずうみクラブ）
8. 『おおあらひこ』第38号（大荒比古神社）
9. 「滋賀文化のススメ」(<https://www.shigabunka.net/archives/category/rekishu/shiseki>)
10. 『新旭町誌』新旭町誌編さん委員会編（新旭町）
11. 「大溝祭と町人文化」（木津勝 講演より）

12. 「大溝の水辺さんぽ」（高島市文化遺産活用実行委員会）
13. 『おおみぞこみぞ通信』9号（大溝の水辺景観まちづくり協議会）
14. 『大溝の水辺景観』保存活用事業報告書（高島市）
15. 平成三十年度春季特別展「大溝藩と分部氏―城下町の400年―」（高島市教育委員会）
16. 「高島市歴史散歩No.161～169」『広報たかしま』（高島市）

「ハレの日（慶事）」の食事と日本遺産

故郷の味は幾つになっても楽しみなもの。ましてお目出度いお祭りは「ハレの日」、家族も招かれた人達も食卓一杯に出揃った、ご馳走に心ウキウキ、祭り気分が盛り上ってきます。

ところで、私達の湖魚を食べる食習慣は「日本遺産・琵琶湖とその水辺景観―祈りと暮らしの水遺産」に「水と食の文化」として認定されています。高島市の「水辺景観」としては以下三地域、①海津・西浜・知内、②針江・霜降、③大溝が認定されています。

私達は水を巧みに生活に活用し、水を敬い、畏れ、救いと安らぎを求める「水文化」と共に、琵琶湖の湖魚食や鮒ずしはじめ、発酵食などの伝統料理を継承してきました。こうした知恵の結晶である暮らしぶりは、豊穣を願い神様を敬うお祭りや伝統行事にも深く関わっています。

取材した三地域のお祭りに継承されるご神饌と直会は、琵琶湖と共にある高島の食事のあり方と感謝を今に伝えていました。

七川祭の「神御供の式」のご神饌

ご神饌はへぎの台に載せられた「赤飯（盛槽で形を整えられ、檜の葉の上に載せる）」「生ふぎ二本」「干鮎二尾」です。稲作社会の素朴な海・山・里の幸を「神人共食」する日本の「まつり」の本質が現在まで継続されています。



活動テーマ

人とつながる小さな農業で自然を活かす

自然を活かすとはどういったことなのだろう。どうしても問題提起が大きくなりがちなまちづくりですが、本当は小さなことから、身近な視点で、今暮らしている人たちがどのように自然を活かしているのかを知ることが今後の高島市に必要な情報ではないかと思いました。

テーマの背景

自然環境が豊かな高島市。米作り、びわ湖の漁業、森林を活用した木材。観光では海津大崎の桜並木、湖岸に続く水泳場、スキー場、メタセコイア並木、高島トレイル、おにゅう峠からの雲海などがあります。豊富な湧水を使った酒・お酢・醤油造りに、製糸産業もあります。また、水と食料と風土で培われた発酵食品文化などもあります。高島市は、自然環境を抜きにしては、文化や産業を語る事はできません。

活動目的

市内には小規模な農業を始めた人や家庭菜園をやりたい移住者はたくさんいるが、大規模農業の支援制度しか整っていないのが現状です。小さな農業を始めたい人たちにとって大事なことは、地域で自家消費用の野菜を作っている方とのつながりではないかと考

えました。

市民が地域のつながりによる農業活動を展開し、子どもたちに農業体験を提供することで、市民の農業への興味関心や地域愛が育つのではないかと、小さな農業が耕作放棄地の減少や、高島の美しい景観を守ることにつながるのではないかと考えました。

そこで、身近にいる、近所で畑をされている方に栽培方法や、畑づくりを通して地域のつながりなどについて聞き取り調査を行い、新たに小規模農業や家庭菜園を始める人を増やすためのヒントを得ることを目的とします。

活動方法

グループのメンバーが知っている農業や家庭菜園をされている方に、次のような質問をしました。

- ・家庭菜園を始めたきっかけ
- ・土地の入手方法、土の作り方

- ・野菜の種類や栽培の方法・工夫
- ・貸し出し農地の有無や、農業体験の実施など

それなら田んぼやってみるか？

▼朽木針畑K集落のDさん

20年前、都会暮らしから農的・田舎暮らしを突然思い立ち、朽木針畑K集落に。土地は田舎暮らしの土地売買を専門にしている、京都の会社を通じて購入。半年後、小さな木の家を作る。一年間は、何もせず田舎暮らしを堪能。一年を過ぎ、在所の方の田んぼ生活。米作りを見て、野菜のおすそ分けを貰ううちに、自分が食べるものを作ってみたいと思う。まずは、庭先で小さな畑もどきを始める。

家の前で田んぼをしている在所の方と話すうち、「それなら、田んぼやってみるか？」と、その方から小さな田んぼを貸してもらうことに。初めての田んぼ・米作りで、田起こし・田掻きや苗作りは、田んぼを貸してくれた方が助けてくれた。ただ、せっかくの飯米作りなので、田植えと稲刈りと田んぼの草取りは自身の手で。畦刈などもするので草刈り機を購入。また、貸した方から米作りのアドバイスは受けましたが、押しつけではなく、「無農薬」なども理解を示してくれた。ただ数年

間は、集落全体でやる「カメムシ駆除」散布はしていた。庭先での野菜作りは、シカやサルの子害にあい規模拡大は断念したが、飯米作りは今も続けている。

今は、移住や就農など、役所などに専門の相談窓口があるが、その頃は、役所の窓口相談に行くと、「何か文句を言いに来た」と誤解される雰囲気だったと、懐かしむ。移住一年を過ぎたころから、ミニコミ紙を作り、都会の友人などに、農的・田舎暮らしの様子を毎月発信し、しばらくしてブログも始めたとのこと。ミニコミ紙・ブログ・SNSなどの情報発信を通じて、京阪神からの田んぼ友もでき、田植え・稲刈りなどの参加者も。今年の田植えには40人近く、稲刈りにも30人近くの方が参加。常連さんといって、10数年近く通っている方もいるそうです。

K集落での農的暮らしを支えたのは、都会・大阪で働く妻でした。「都会で稼いで、田舎で農的暮らしをする」二重生活ですが身の丈に合った生活スタイルだと、Dさんのように可能です。また、大阪から電車と車を乗りついで、2時間弱で来れる。そんなこともあり、週末や休日は、お二人で田舎・農的暮らしを楽しみ、週明けに職場に直行する妻を車で京都まで送る、健全なる別

居生活を、妻が早期退職するまでつづけたとのことでした。

妻は早期退職を機に大阪生活に終止符を打ち、今は、集落の一員として役なども引き受けています。高島の豊かな自然の中で生かされて、健康で元氣な老後をおくり、二人での農的・田舎暮らしを維持・堪能したいと思っ

取れ立ての野菜をまわりの人に

▼朽木地子原のMさん

朽木中学校を卒業後、安曇川の会社に5年ほど勤務。その後、現在の場所で縫製の仕事を始められた。仕事は今は息子さんが引き継いで、Mさん

また手伝いをされている。代々引き継いできた土地が自宅と縫製所前にあり、自給自足のため季節ごとに種類を変えて野菜を作っている。春はじゃがいも（4月中旬に植え6月に収穫）、夏はとうもろこし、きゅうり、なす、唐辛子、かぼちゃ、さといも、秋から冬は大根、ねぎ、菊菜、チンゲン菜、ほうれん草、かぶら、キャベツ（11月末に植え翌年5・6月に収穫）、白菜、豆、玉ねぎ（秋に植え6月収穫）などです。

野菜はほとんど買ったことがなく、冬に少し買う程度。出来た野菜はまわ

りの人にもあげていて、私も時々新鮮で立派な野菜を頂きとてもありがたく思っています。かぼちゃだったら「天ぷらにするとおいしいよ」とか、大根は「葉っぱも炒めて食べるといいよ」とか、渡して下さる時にさりげなくおいしく食べるコツも教えてもらい助かっています。

畑はいつもきれいに整えられていて、周りの里山の風景ともしっくりなじんでいます。畑の前を通る人にも良さが分かるようで、私の知り合いの方が「あそこのかぼちゃは上手に育ててはるよね」と聞くことも。よっぽど気を使ってやってらっしゃるのかと思いきや、「母親から教わったことをそのとおりにしてるだけや」と。

土には近くの牧場の堆肥やホームセンターの牛糞、馬糞、鶏糞などを入れている。同じ集落のOさんは自分で堆肥をつくっていると教えてもらい、後日Oさんに話をきいてみると、家の敷地に小屋を建ててそこで堆肥を作っているそう。油かす、米ぬかに肥料を少し入れ水も加えて混ぜて作る。年中作れるが季節や気候によって発酵具合が変わるので手を入れて確かめる。道の駅にも置いてもらい、たまに購入したお客さんから電話がかかってくる「よかった!」と言ってもらえるのが嬉し

いとおっしゃる。

タネ（なす、きゅうり、かぼちゃ）や苗は農協やホームセンターで購入。昔は山の近くでも畑をやっていたが、猿やイノシシが里に下りてくるようになったので今はやる人がいなくな

った。夏は草刈りをしてくださったり、雪の時は除雪を手伝ってくれたり（ほとんどやつてもらっています）と年々お世話になっているMさん。いつも当たり前のようによつてくださる姿勢に感謝と尊敬の気持ちばかりです。

好きなだけ無農薬の新鮮野菜

▼安曇川町のKさん

Kさんは、移住者ではなく、地元生まれ、地元育ち。高島の歴史を実感として感じ、時を過ごしてこられた。若い頃はサラリーマン。市外へ通っていたこともある。

農的暮らしを始めたのは定年後。地元の強みで知り合いの土地を借りられることになり、お兄さんが少し前に始めていた畑と一緒にやり始めた。畑を耕す事、種をまくこと、素人からの出発であった。土作り、種の知識などは園芸の本を熟読、また、周りの畑をしている人に聞いたり、試行錯誤の積み重ね。種はホームセンターなどでも

購入するが、トマトやキュウリに関しては、宮野のビニールハウスで良い苗を育てているところで購入する。こだわっている苗である。

1年間のサイクルの中で、夏野菜は5月5日（子どもの日）を目安に、冬野菜は9月5日（白髭明神祭）を目安に、なるべく大安の日に種まきをするなど歳時は時折考慮している。連作障害などが起こらないように、畑に植えた物、どの筋に植えたか、すべて記録をとっている。この記録がとても役に立つ。自分が何をしていたか思い返すにも役に立つと笑う。

安曇川町の山側ではなく、どちらかというと安曇川駅に近い畑でも、様々な苦労が絶えない。山側だと、シカ、イノシシ、サルだが、こちら辺では、モグラ、特にカラスは大敵である。台風、大雨の被害も大きく、修復は大変な作業である。

一生懸命育てた野菜は親族に配ったり、家族で食べている。畑では年間を通じて25種類以上の野菜を育てている。初収穫は特にうれしいもので、わが子を育てる感覚と似ている。畑をはじめ10年以上たつたが、毎朝6時30分に畑に行くことが楽しみになっている。あの意味、生きがいになっていると言っても過言ではない。

病気を患ったこともあり、食の大切さがわかる。無農薬で好きなかだけ新鮮な野菜を食べられるのは本当に健康である。体を動かし、食欲がわく。

今後（夢）は、野菜の種類を減らし、子どもたちが喜ぶような野菜、いちごなどをたくさん栽培し、地元の幼稚園に寄付できればと考えている。

集落ブランドを作りたい

▼マキノK集落のNさん

3年前に、朽木に一年間住む。自然農法による農的暮らし実践のために、マキノ町K集落に移住。

京都での学生時代は国際問題に関することを学んでいた。その時にアフリカを訪れる機会があり、難民問題などを実感したが、それ以上に、現地の方が自然栽培で作った野菜が美味しかった。その生活観と生活スタイルに触れ「こころの豊かさを知った」。アフリカに行つて人生観が変わったとも。卒業後は農業法人にしばらく務める。

京都から朽木に。市役所の移住相談員の方から紹介された朽木の市営住宅に住みながら、安曇川町で畑を借りて、農的暮らしの一步を踏み出した。高島市は、実家のある京都からも近く自然豊かで、先に移住した友達のつながりもあり、移住を決めたとのこと。

また、当時の移住相談員の方が、熱心アドバイスをしてくれたとも。

自然農法による農的暮らしの拠点として、マキノのK集落で古民家を確保できたので、そちらに移転。K集落は戸数30戸、人口90人。若い女子の移住は集落で歓迎され、畑やトラクターなどの農機具も貸してもらうことができた。また、種まきなどの時期や適した野菜などについて、地元の方からアドバイスがあり助かっている。

現在借りている8反の畑では、季節で違うが、ねりま大根、あずき、大豆、ゴマ、赤シソなどを自然農法で作っている。「自然農法は草取り大変では」と聞くと、基本一人でやっているの、6月から9月まで草に追われている。草は抜かず刈払機で刈って、畝に敷いておくと「つぎの草が生えない」。

畑の土づくりは、落ち葉などを集めて堆肥をつくって漉き込んでいる。また、作物の種は、在来種で自家採取した種を使っている。購入には、インターネットなどの情報を活用している。

作った野菜などは、京都市内や高島でも売っているが、課題は収量の確保。生活基盤の安定のために、加工品の漬物・お菓子なども作り、マルシェなどに出品しているそうです。また、農業や味噌作りなどの体験なども受け入れ

ているとのこと。

住んでいる古民家を活用しての宿泊や体験農業などの受け入れ、また、日本の伝統野菜やハーブを育てたいなどの思いも。それらを通じて地域の方たちと「K（集落名）ブランド」を作り、地域の活性化をしたい。

高島市に移住して、農的暮らしを実践できたのは、当時の移住相談窓口担当者が熱心で、移住者が求める情報を集約して、人脈ネットワークがあつたからではないか。それと、京阪神に近く豊かな自然環境がのこる、高島市という環境は言うまでもない。

調査から見えてきたのは

「食」と直結する畑づくりが、自然を活かした暮らし方であり、高島市の魅力である自然の一部を形作っていると感じました。ご近所さんの話を聞く機会はなかなかなかったので、もっと早く積極的に聞いてみればよかったという思いと、話の中でまた新たな情報が得られることのおもしろさを感じました。

大多数の市民にとって自分の暮らしの中で、大きな農業にたずさわるのは難しいけれど、市民であれば、年齢に関係なく、いつからでも安心して畑を耕すことができ、家族用の野菜や果物の収穫にわくわくする毎日を過ごすことができました。素敵な高島市だと思います。

自然が豊かな高島でいまさら自然との関わりを考える必要があるのかと思われるかもしれませんが、小さな視点からみえてくる「自然を活かした高島暮らし」には、大きなまちづくり全体に活かせることがあるのではないのでしょうか。移住なども含め、高島暮らしでは、行政の取り組み以上に、人脈ネットワークが重要だと感じました。



写真1 「森林公園くつきの森」でのインタビュー



第2部

第2期高島市まちづくり推進会議の 概要

第2期高島市まちづくり推進会議の挑戦

この報告書を手にされた方には、「参加」や「協働」は聞き慣れた言葉かもしれません。高島市まちづくり推進会議も住民参加や市民協働によるまちづくりの一つのかたちです。その上で、想像していた活動や報告書とは少し違うと感じてもらえたのなら、私たち高島市第2期まちづくり推進会議にとってまずは小さな成功です。ここでは、この報告書の背景や成り立ちについて説明します。

平成17年の5町1村の合併を背景に、高島市では一体的な市の発展に取り組むための「高島市まちづくり推進会議」（以下、「推進会議」と略す）が平成27年に設置されました。市民自らがまちづくりの課題と対策を検討することで、魅力あるまちづくりの推進につながっていくことが期待されている事業です。その第2期の推進会議が、平成29年度に市民委員26名（P. 45参照）の参加で始まりました。

第2期まちづくり推進会議の挑戦

一般的に「参加型」と呼ばれる集会やワークショップは、市民による意見の表明や交換が基本的な形式です。第2期推進会議のスタートにあたって、私たちはすこし新しいかたちに挑戦しようと考えました。

第一に、行政に対する一方面的提言に終始するのではなく、自治会や市民

団体、住民の役割や行動の可能性についても考えることにしました。

第二に、課題解決への要望や意見の表明から一歩踏み出して、課題のより深い理解を目指した調査活動を行うことにしました。調査の経験や得られた根拠が市民の政策提言力を高めると考えたからです（宮内2004）。

そして、第三に、共通の目標として高島市の将来像を創りました。さまざまな側面におよぶまちづくりについて、個別の課題に取り組みながらも、課題相互のつながりや全体像を見失わないようにするための目標です。

これらのアプローチや発想の一つ一つが新しいというわけではありませんが、それらが組み合わせられた二年間のプログラムは、「挑戦」という表現に値するものだと考えています。

市民と行政と研究者の協働

まず、その挑戦をサポートした組織の特徴について紹介します（P. 42とP. 45を参照）。高島市役所市民協働課と、市民活動やまちづくり促進の拠点であるたかしま市民協働交流センター、そして、滋賀県琵琶湖環境科学研究センターや他府県の大学・研究機関、以上の組織に所属するメンバーで事務局を構成しました。この事務局で推進会議の具体的なプログラムやワークショップの進め方などを検討しました。重要な議題については、事務局に数名の市民委員の代表者を加えた運営委員会で議論しました。

そして、推進会議の活動の中心である市民委員に、まちづくりに関連する市の担当局職員が本部員として加わることで、市民協働の体制をとりました。事務局が全体会議でファシリテーターを務め、調査活動を支援しました。研究者チームが将来像のストーリー化と見える化を担当しました。

チームで取り組むための「対話」と「将来像」

推進会議の1年目では、計4回の全体会議（P. 42）を開催しました。その第1回では、特別講師を招いて、相手の発言を否定しないなどの「哲学対話」のルールを確かめました（梶谷2018）。「会話」でも「説得」でもない、互いの意見から共通の理解を広げるためのコミュニケーションを意識するためです。

次は高島市の将来像を思い描く作業です。詳細についてはP. 38もご覧ください。模造紙とポストイットを使いながら、それぞれの願いとその実現のために必要だと考えることを出しました。そして、『第2次高島市総合計画（2017～2026年度）』に記載された行政の施策と、高島市内のNPOや市民団体の活動内容が書かれた紙片を用意して、それらを模造紙上の関係する願いとアイデアに貼る作業を行いました。現時点での



写真1 第1回全体会議での「哲学対話」

行政の施策と市民団体の活動状況との対応を把握するためです。



写真2 働き方の将来像を思い描く作業

調べたいテーマをみんなで決める

推進会議の2年目では、まず、1年目の全体会議で議論された内容を整理して、「コミュニティ」、「働き方」、「自然」、「育つ・学ぶ」、「文化」の5つのテーマに課題群を整理しました。この中から、チームとして調査に取り組みテーマを選びました。そのための段取りとして、関心を持ったテーマと課題群を対象に「問いを立てる」グループワークを行いました。このワークでは、5 W 1 H（だれ、どこ、なに、なぜ、いつ、どのようにして）が印刷された6枚の「疑問詞カード」を使って、調査の切り口となる問いを探しました。そ

して、協力して出しあった皆さんの問いの中から、自分が重要だと考える問いを選んで投票をしました。その結果を参考にチームにわかれた後、あらためて調査課題について議論を重ねました。

少しの違いのつながりが見える可能性

そして、この報告書の第1部に掲載された調査活動です。その評価は読者に委ねますが、市民と行政と研究者が共に一つの課題に取り組んでいると感じる瞬間が確かにあったことはお伝えしたいと思います。自身が暮らす高島市の現状と未来に関心を寄せる市民と、テーマを深く調べる技法を知る研

究者、そして、課題の現場に精通する自治体の職員、そんなつながりから生まれたのがこの報告書です。もちろん、万事が順調だったわけではありません。それぞれが思い考えることのすりあわせや、限られた時間の中で集うことの難しさもありました。それでも今回、市民と行政と研究者のそれぞれに、これまでとは少しだけ違ったかわり方を求めた推進会議の可能性が、二年という時間の中で見えてきたように思います。

新しいまちづくりのかたちを目指して

今回の第2期推進会議で調査を踏まえて検討された課題は、議論された全

体のほんの一部でしかなく、それが解決したわけでもありません。課題を発見する調査を解決する実践へとつないでいくことも課題として残りました。

市民協働を促す制度やプログラムにもさらなる工夫が必要です。本報告書を読まれた方は、ぜひ裏表紙に記載された連絡先に感想をお寄せください。批判でも共感でも、それが次の展開を考えるヒントになります。

少子高齢化や環境問題などを背景に、市民の役割がより重要になることはあっても逆はないはずです。新しいまちづくりのかたちが起ちあがるきっかけに、この少し変わった報告書が役立てられたらと願います。

参考資料

1. 梶谷真司（2018）『考えるとはどういうことか』0歳から100歳までの哲学入門』幻冬舎
2. 高島市（2008）「市民協働のまちづくり推進指針—高島市らしい市民協働の実現に向けて—」滋賀県高島市
3. 宮内泰介（2004）『自分で調べる技術—市民のための調査入門』岩波書店

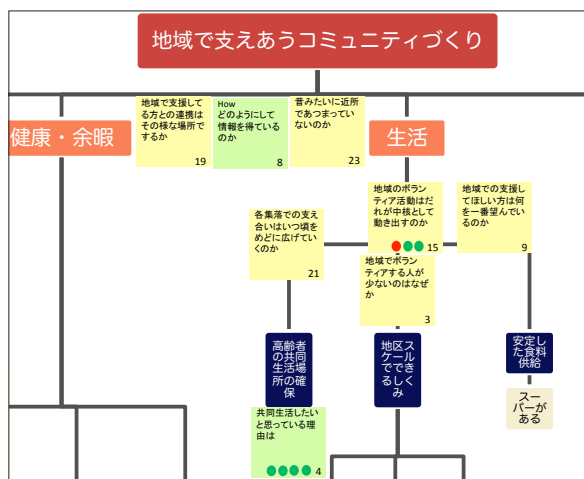


写真3 階層化された課題群と各課題への問い（丸印は投票結果）



写真4 グループ調査の課題を議論

高島市の将来像を創ろう

ストーリーライン

望む将来像を実現するためには、市民、行政、民間など様々な立場の人が将来像のイメージ共有し、それに向けて必要な行動や対策を行っていく必要があります。

第2回高島市まちづくり推進会議では、高島の将来像を考えるにあたって、

まず、高島市の現状を把握し、次に、将来像の対象年である2040年の人口予測や市を取り巻く外部環境の変化（気候変動など）の情報を確認しました。例えば、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、人口は2040年には2010年と比較して32%減少し、高齢化率も28%から41%に上昇す

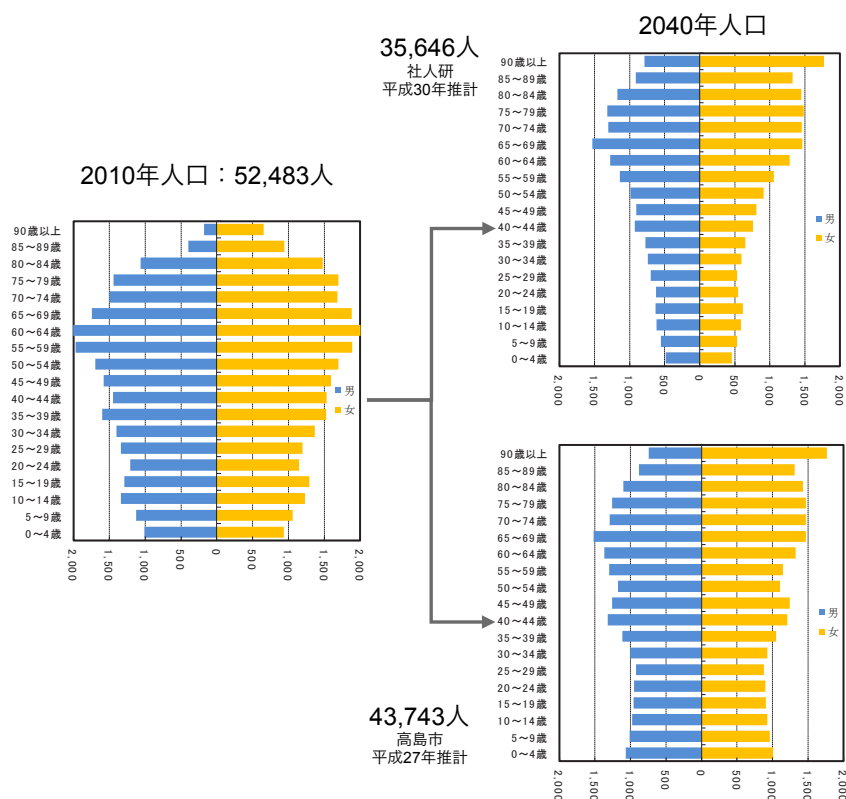


図1 高島市の人口の変化

ると予測されています(図1)。一方で、市では、2040年の人口減少を17%までに抑えようとしています。また、気候変動により、雨や雪の降り方が変化すると言われています。

このようなことを前提条件として、そのうえで、「どんな働き方をしたいか」「何にお金を使いたいか」「オフをどう過ごしたいか」「高島市で残したいものは何か?」のテーマ別に、望む将来社会の要素とその実現に必要なことを議論しました。そして、市全体として望む将来社会の姿を文章でストーリーラインとして表現しました。

〈地域で支えあう〉

仕事や市民活動などを通じた信頼関係のある様々な人と人のつながりがあり、子育てや介護などが地域コミュニティの支援を受けて無理なく行われている。市民一人一人の安全や健康について支えあうコミュニティが形成され、高齢者も市民活動によって提供されている移動支援を受けて地域の活動に参加している。

〈多様な働き方ができる〉

高島市内では、地域資源を活用した多様な働き方が広がっており、休耕地を活用した農業や、そこから供

給される食材を活用したレストランや高齢者向け配食サービス、インターネットを活用した地場産品の販売、自然や歴史文化を活かした観光ガイドなどを組み合わせてフレキシブルに働いている。

〈地域で育ち・学び・働く〉

集落の人口は減少したものの、地域に残った若者や移住者が地域に溶け込み、地域の人々が学校教育の現場で子どもたちに教師となって郷土教育を実践することで魅力を伝え、高島市に住むことに誇りを持ち地域コミュニティを支える人材を育成する。

〈高島の文化伝統を継承する〉

地域で受け継がれている生活の知恵や地場産業の技、伝統や文化、豊かな生物多様性について、地域の人々が相互に学びあい知識を深め、地域サロンや集落行事、祭りなどが盛んに行われている。

〈地域資源を活かす・守る・再生する〉

豊かな森林資源と共に歩む林業を通じて供給される木材は、地場産業で活用され地域の雇用を多く生み出し、整備利用された美しい自然景観を楽しむビワイチやトレイルなどを目的に多く

の観光客が訪れ、地元産野菜や琵琶湖や河川の湖魚を使った伝統料理が人気を集めている。地域の支えあいや多様な働き方により空いた時間で趣味や地域活動を行いつつ、豊かな自然の中のびのびとした生活をおくっている。

定量的将来像

ストーリーラインに描かれた要素を実現する社会とはどのような社会なのか、人々の暮らし方や産業構造などを入力情報とし、様々な項目が社会全体として整合性が取れるよう「環境経済社会統合評価モデル」を用いて、環境・経済・社会の観点から評価し、定量的な将来像を作成しました。将来の計算に、ストーリーラインで出てきた要素をどのように取り込んだのか、その例を表1に示しています。

例えば、多様な働き方があり、地域内で支えあいなどを含めた小さなビジネスがたくさんあることで、各年代、特に女性の就業率が増えています。また、このような変化は、市内で働く人の比率を増加させます。地域の資源を活かした産業が興り、第6次産業が7.7%発生しています。

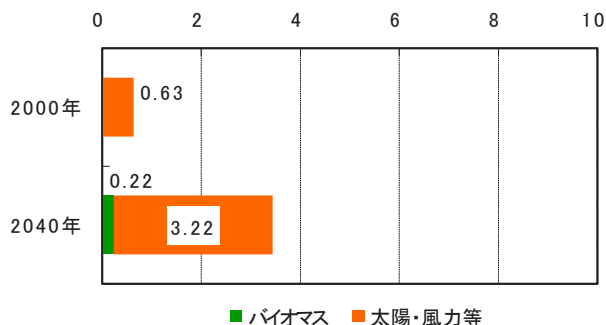
また、時間の使い方が変化し、男性が地域と関わる時間が3倍に増えています。

表1 ストーリーラインと定量化のつながり

項目	高島市まちづくり推進会議での意見	環境経済社会統合評価モデルでの定量化
人口世帯	両親と子が近くに住んでいて、高齢者は一人になっても孤独ではなく、子持ち世帯は親に子育て支援を受けることも可能（必ずしも同居でなくてよい）。 高齢で一人で生活出来なくなったときの共同の生活場所の確保。 高島の高校は進学校で、いい大学への進学率が高くなり、教育産業が振興している。高島の高校への進学を目指して、子どもをもつ世帯の転入がある。	43,660人 (高島市まち・ひと・しごと創生総合戦略より) 16,792世帯 世帯あたり2.6人
就業率	仕事（本業、兼業）を通じたつながりがある。 長男以外の子どもたちにも仕事（居場所）がある。 複数の仕事をもつことで、人とのつながりが広がり、地域との関連も多くなる。 定年前から本業以外のことに携わることで、定年後にスムーズに次の仕事に移行しやすい。生涯年収の安定的な確保。 働き方の柔軟性（週当たりでの労働時間の管理、季節別労働、など） 仕事を見つけやすいよう、各年代ごとの人材登録＝サービス需給マッチングシステムがある。ワークシェアのシステムが一般化している。 起業支援のシステムもあり、大学で市外に出た長男以外（長男は公務員多し）の子どもたちや高齢者が主な起業家となる。	<2000> 15～64歳男性：80.8% 65歳以上男性：33.9% 15～64歳女性：55.5% 65歳以上女性：12.3% ↓ <2040> 15～64歳男性：86.1% 65歳以上男性：52.4% 15～64歳女性：81.8% 65歳以上女性：41.3%
市内で働く人	仕事は高島市外のこともあるが、住居は高島にあり、基盤は高島とする。 高齢者やパート中心の勤務で成り立っている観光地の整備会社が起業されて、観光地が整備されている。自然は、ただあるのではなく、自然環境を積極的に使う。 起業支援のシステムもあり、大学で市外に出た長男以外（長男は公務員多し）の子どもたちや高齢者が主な起業家となる。（再掲）	<2000> 約85% ↓ <2040> 約90%
市内での働き方の割合	時間の使い方を自分でコントロールできるように、自営の仕事が増える。 半農半Xが基本。農地法が改正され、誰でも畑を借りられる制度（できれば無償）があり、畑の需給マッチングシステム（借り手と貸し手の安心をつなぐ信頼関係（つなぐ人など）も必要）もある。 環境に優しい農業を行っており、都市や市内で無農薬野菜などを求めるレストランや個人と契約して栽培する。 田んぼを田んぼとして使うオーナー制度とする（＝ソーラーパネル制限）。 信頼関係があり、集落ごとに「困り事お助け隊」などがある。 防災講習サロンなどにより、住民主体で災害時の自・共・公助を知る機会がある。 中高生も防災時には大活躍。 高島のいいところを親がまず知り、子に伝えていく文化。 廃校を利用した高専（専門学校校舎）があり、大人の通学もあり、最先端の知識を活かした新しい作物の作付や農業ビジネスなどの起業につながっている。 高齢者輸送タクシーサービスがある。	<2000> 第1次産業：7.3% 第2次産業：43.9% 第3次産業：48.8% ↓ <2040> 第1次産業：4.3% 第2次産業：39.7% 第3次産業：42.9% 自給のための農作業：1.8% 第6次産業：7.7% コミュニティのための仕事：3.6% (バスの運行、子育て、教育、介護福祉など)
一日あたりの生活時間	アフター5が確保されており、スポーツや里山散歩、ビールをゆっくり飲んで過ごす。 高齢になっても友人に会い、自家製野菜で持ち寄りパーティーをしたり、孫に囲まれて賑やかに過ごす。 祭りや行事を途絶えさせない（イベントの後ろ盾になる資金を投入する）。 地域の人が集まれる場所があり、ママの集まり、同じ立場の人の集まり、世代を超えて高齢者と子どもが一緒に遊び道具を作る、など交流がある。 地域が子どもを見守る。 行政や地域社会の育児支援があり、まちには子どもの声があふれ、集落の祭りなど地域行事で子どもたちは楽しんでいる。 余暇には、高島市内で美味しいものを食べていたい。 登山コースが整備されていて、余暇に子どもと山登りをする。 歩くことを重視し、歩いて見えてくるものや（電車を）待つ時間を人と交流したりして楽しむ（歩くので、健康増進にもつながる）。 高齢者のボランティアを中心に、地域の自然環境整備がなされて、きれいな山、空気、水が保全されている。 市民は皆、道や景観がきれいであることに誇りをもっており、除草ボランティアグループや近隣の道の草刈り、花づくりなどをする人がたくさんいる。 「時間を誰かのために使おう」キャンペーンに参加する人（特に高齢者）がたくさんいて、ボランティアに参加すると特典がある。	<2000> 男性（40歳 就業者の場合） 仕事：7.4時間 家事：0.2時間 交際・社会参加：0.5時間 女性（40歳 就業者の場合） 仕事：4.6時間 家事：3.3時間 交際・社会参加：0.3時間 ↓ <2040> 男性 仕事：2時間減（就業者のみ） 家事：0.5時間増（就業者のみ） 交際・社会参加：1.5時間増 女性 仕事：0.5時間増（就業者のみ） 家事：0.2時間減（就業者のみ） 交際・社会参加：0.5時間増

- 農地と併用した太陽光発電や小水力発電、切り捨て間伐材の薪利用など、再生可能エネルギーとしての地域自然の活用が進む

再生可能エネルギー使用量 (ktoe)



高島市の将来像を 数値で見よう

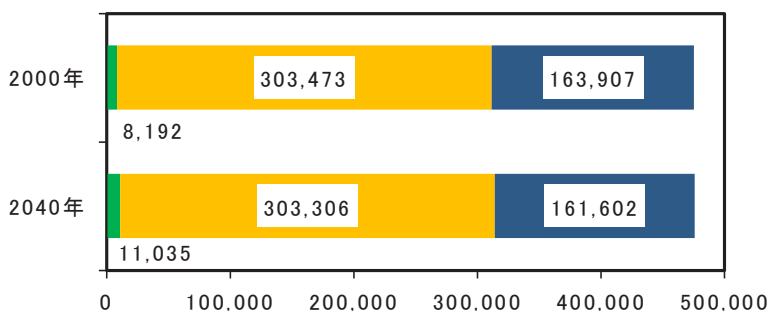
地域の人々が楽しみながら育て、

活用する森里川湖がつながる観光業が地域を支える

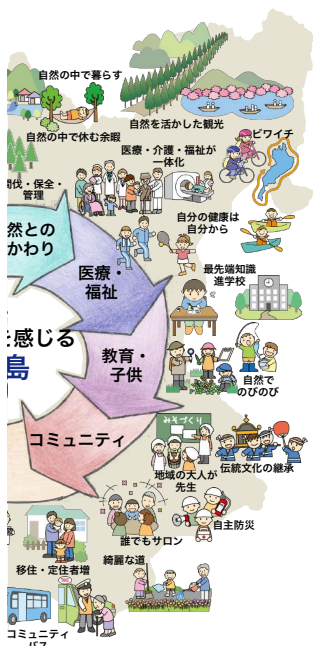
- 環境にやさしい農業により無農薬野菜などを求めるレストランなどへの農作物供給が増える
- 田畑と太陽光発電の併用などにより収入が増え、若い人が農業に参入できるようになる
- 間伐が進み森林景観が保全され、林業とともにエコツーリズムも広がる

産業別生産額 (百万円)

■ 第1次産業 ■ 第2次産業 ■ 第3次産業



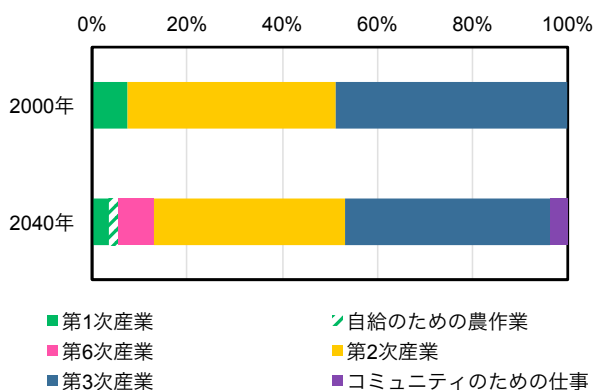
- 農林水産業の生産額が1.3倍に拡大



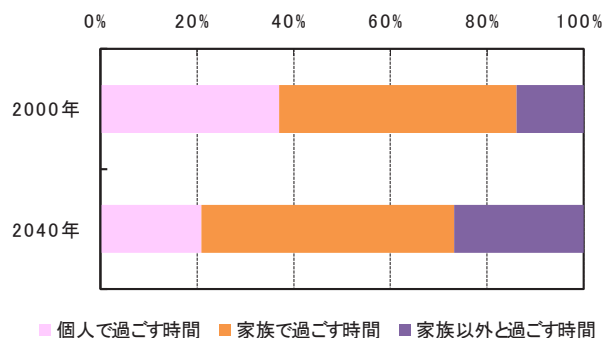
地域で育ち、学び、働く。最先端知識とのびのび子育て

- 地域コミュニティの課題や困りごとと解決などのソーシャルビジネスの創出および地域の教育・福祉関連の仕事に携わる住民が増え、地域内で働く時間が増える
- 家族団らんなどを大切にするライフスタイルに変化し、家族と過ごす時間が増える
- 地域コミュニティ内での相互扶助や地域活動への参加が進み、地域の人々が共に過ごす時間が増える

市内での働き方 (地域合計) の割合



仕事以外の生活行動時間 (地域合計) の割合

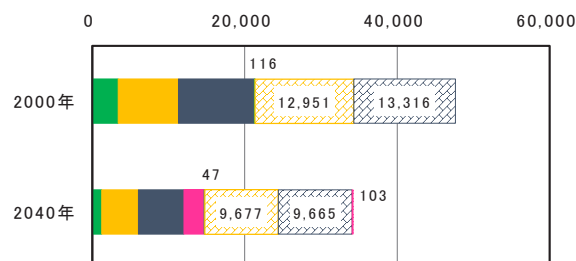


■ 第1次産業 ■ 自給のための農作業 ■ 個人で過ごす時間 ■ 家族で過ごす時間 ■ 家族以外と過ごす時間
 ■ 第6次産業 ■ 第2次産業 ■ コミュニティのための仕事

人と人のつながりが地域を支え、若者と高齢者も働きがいを持ち元気

- 地域の物的・人的資源を活用することで、地元になたな仕事生まれ、地域内で働く人が増えている
- 農林水産業を基軸とする「第6次産業」の創出により、コミュニティ内部での助け合いによる教育・福祉の仕事などが増え、人々の地域内で働く時間が増加している
- 職住近接の人が増え、市外からの労働力の流入は減少する

就業者の常住地からみた就業時間（1,000hr）



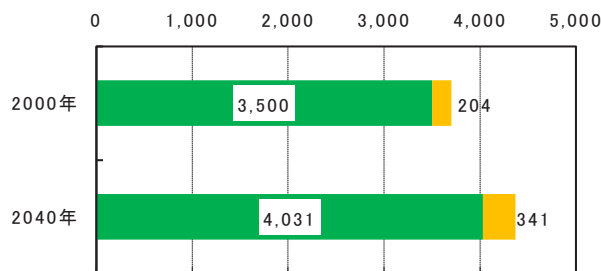
市内からの労働力→ 第1次産業 第2次産業 第3次産業 第6次産業
市外からの労働力→ 第1次産業 第2次産業 第3次産業 第6次産業

地産地消で旬を感じる。

食と観光の合わせ技で、地域がにぎわう

- 第6次産業を含め、自然を活用した産業が盛り上がり、自然と接しながら働く時間が増えている
- 地域の豊かな自然や文化を活用したエコツーリズムなどが人気を呼び、サービス業が約70%（204hr→341hr）増加（金額換算で15億円から36億円に）している

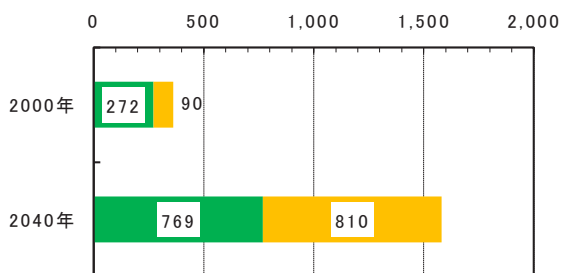
延べ仕事時間（1,000人・hr）



■ 農林水産業・自給自足型農業 ■ 地域の自然を観光資源としたサービス業

- 野菜の直売所やスーパーなどでの地元野菜の販売量が増えたり、地元産材での家屋新築やリフォームが進む
- 給食やレストランなどでフードマイレージの低減進み、地元農林水産物の消費量が増加している

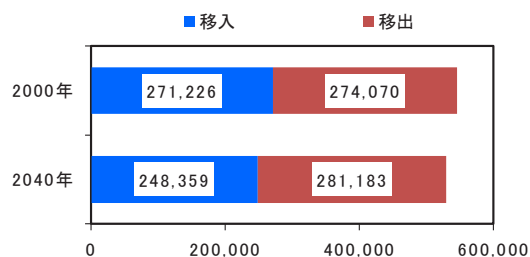
農林水産関連の生産額（百万円）



■ 市内での農林水産自給分 ■ その他の市内需要から誘発された生産分

- 人口は減少しているが、生産性の向上や付加価値の増大により、地域全体としての生産高は横ばいで維持している
- 地産地消が進み地域の物的資源の活用が進んでいるので、他地域からの移入が減少している
- 地域の特産品などの市外への販売促進などにより、他地域への移出が増加している

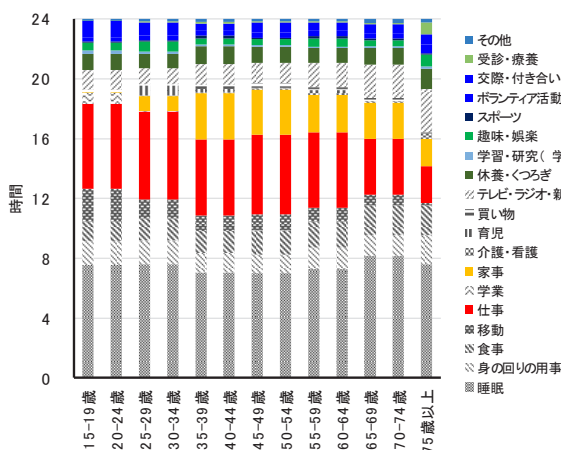
高島市の生産額（百万円）



地域で活動する女性の時間が増える

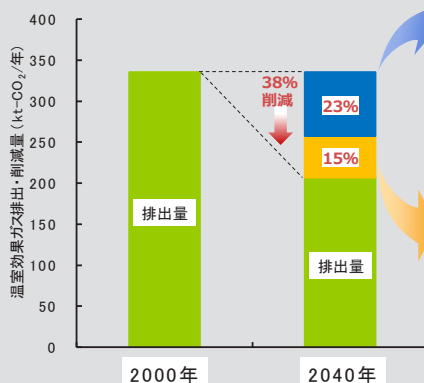
- 女性の社会進出がさらに加速し、地域で働く女性の時間が増加している
- 家事の効率化や各種サービスやサポートの充実により家事の時間が減少している
- 仕事以外でも、ボランティア活動や社会活動などに参加する女性が増えており、地域コミュニティでの交際や付き合い時間が増加する

生活時間（女性、就業者）
2040年



温室効果ガスの削減要因

- 高島の持続可能性には、地球の持続可能性が大前提！
- CO₂ 排出量は38%削減



社会変革による削減

- 社会構造の変革がもたらす、
- ・ライフスタイルの転換による減少
- ・地域産業の創成
- ・移動・輸送そのものの減少
- ・協働による地域内移動の効率化
- ・再生可能エネルギーの利用 など

技術対応による削減

- ・燃料転換（石油から天然ガスへ）
- ・エネルギー機器の高効率化
- ・燃費改善（電気自動車含む） など

活動記録

〈全体会議〉

	内容	開催日時	場所
第1回	推進会議について 哲学対話	平成29年7月9日	今津東コミセン
第2回	高島の現状を知ろう！ 理想の高島市の将来像	平成29年8月26日	新旭公民館
第3回	行政の取り組み 自分たちのまちは自分たちでつくる	平成29年12月2日	安曇川公民館
第4回	市内の市民活動団体について 理想の高島市の将来像	平成30年2月25日	高島公民館
第5回	将来像の発表 ワールドカフェ	平成30年6月3日	安曇川公民館
第6回	推進会議について 各グループ活動計画書の共有	平成30年7月19日	新旭公民館
第7回	グループ活動中間報告会 哲学対話	平成30年11月17日	安曇川公民館
第8回	活動成果報告 交流会	平成31年3月23日	新旭公民館

〈運営委員会〉

	内容	開催日時	場所
第1回	委員長等の選任	平成29年9月14日	安曇川公民館
第2回	委員長等の選任、資料確認	平成29年10月13日	安曇川公民館
第3回	第3回会議内容の確認	平成29年11月16日	安曇川公民館
第4回	グループ分け方法について	平成29年12月21日	安曇川公民館
第5回	第4回会議について	平成30年2月6日	新旭公民館
第6回	事前アンケート集計共有	平成30年3月20日	今津東コミセン
第7回	第5回会議について	平成30年4月19日	安曇川公民館
第8回	グループ活動分野について	平成30年5月11日	安曇川公民館
第9回	第5回会議のふりかえり	平成30年9月7日	安曇川公民館
第10回	報告書の様式について	平成30年10月1日	安曇川公民館
第11回	報告書の内容について	平成30年10月29日	安曇川公民館

〈地域で支えあうコミュニティづくり〉グループ活動

	内容	開催日時	場所
第1回	付箋確認、活動テーマ決め	平成30年6月10日	安曇川公民館
第2回	活動計画書作成、テーマ決定	平成30年6月18日	安曇川公民館
第3回	アンケート（項目出し）	平成30年8月9日	安曇川公民館
第4回	アンケート（地域選択、項目精査）	平成30年8月21日	新旭公民館
第5回	アンケート（項目精査）	平成30年9月14日	新旭公民館
第6回	アンケート（項目精査）	平成30年10月3日	新旭公民館
第7回	アンケート（項目精査）	平成30年10月26日	新旭公民館
第8回	アンケート（最終精査）中間報告準備	平成30年11月9日	新旭公民館
第9回	アンケート結果入力	平成30年12月10日	本庁（新館）
第10回	アンケート結果共有	平成30年12月20日	本庁（新館）
第11回	結果共有・分析、報告書内容確認	平成31年1月16日	本庁（新館）
第12回	結果共有・分析、報告書内容確認	平成31年1月22日	本庁（新館）
第13回	報告書内容確認	平成31年1月29日	本庁（新館）
第14回	報告書内容確認	平成31年2月5日	本庁（新館）

〈多様な働き方ができる〉グループ活動

	内容	開催日時	場所
第1回	付箋確認、活動テーマ決め	平成30年6月12日	本庁（本館）
第2回	活動計画書作成	平成30年6月28日	安曇川公民館
第3回	活動内容整理、質問項目整理	平成30年10月30日	本庁（新館）
第4回	就職フェア結果共有、調査項目整理	平成30年11月5日	本庁（新館）
第5回	アンケート（項目整理）中間報告準備	平成30年11月15日	本庁（新館）
第6回	アンケート（項目整理）	平成30年11月29日	本庁（新館）
第7回	アンケート（項目整理）	平成30年12月4日	本庁（新館）
第8回	アンケート（項目精査）	平成30年12月18日	本庁（新館）
第9回	アンケート（結果分析）報告書作成	平成31年1月17日	本庁（新館）
第10回	アンケート（結果分析）報告書作成	平成31年1月31日	本庁（新館）

〈活かす自然・守る自然〉グループ活動

	内容	開催日時	場所
第1回	付箋確認、活動テーマ決め	平成30年6月6日	安曇川公民館
第2回	活動計画書作成	平成30年6月26日	安曇川公民館
第3回	活動内容確認	平成30年10月1日	安曇川公民館
第4回	インタビュー結果共有	平成30年11月8日	安曇川公民館
第5回	インタビュー	平成30年12月27日	くつきの森

〈地域で学び育つ〉グループ活動

	内容	開催日時	場所
第1回	付箋確認、活動テーマ決め	平成30年6月19日	今津東コミセン
第2回	活動計画書作成	平成30年7月3日	今津東コミセン
第3回	活動計画書作成、コメント確認	平成30年8月22日	今津東コミセン
第4回	活動内容整理、訪問結果共有	平成30年9月11日	今津東コミセン
第5回	活動内容整理、訪問結果共有	平成30年10月23日	今津東コミセン
第6回	中間報告準備	平成30年11月13日	今津東コミセン
第7回	コメント確認、報告書作成	平成30年12月13日	今津東コミセン
第8回	報告書作成	平成31年1月16日	今津東コミセン
第9回	報告書作成	平成31年1月30日	今津東コミセン
第10回	報告書作成	平成31年2月6日	今津東コミセン

〈高島の文化〉グループ活動

	内容	開催日時	場所
第1回	付箋確認、活動テーマ決め	平成30年6月14日	今津東コミセン
第2回	活動計画書作成	平成30年6月28日	新旭公民館
第3回	活動計画書作成	平成30年7月12日	安曇川公民館
第4回	インタビュー質問項目整理など	平成30年7月31日	今津東コミセン
第5回	資料内容確認、質問整理	平成30年8月29日	安曇川公民館
第6回	インタビュー（大溝祭）	平成30年9月13日	高島公民館
第7回	インタビュー（海津力士祭り）	平成30年9月19日	海津二区草の根ハウス
第8回	インタビュー（七川祭）	平成30年10月31日	安曇川公民館
第9回	報告書作成（項目決め）	平成30年12月4日	本庁（新館）
第10回	報告書作成（文章などの確認）	平成30年12月26日	本庁（新館）
第11回	報告書作成（原稿確認）	平成31年1月15日	本庁（新館）
第12回	追加インタビュー（七川祭）	平成31年1月23日	大荒比古神社
第13回	報告書原稿確認	平成31年1月24日	本庁（新館）
第14回	原稿確認（大溝祭）	平成31年1月28日	総門
第15回	原稿確認（七川祭）	平成31年2月1日	大荒比古神社
第16回	報告書作成（原稿確認）	平成31年2月5日	本庁（新館）
第17回	原稿確認（海津力士祭り）	平成31年2月7日	今津東コミセン

第2期高島市まちづくり推進会議関係者一覧（順不同・敬称略）

平成29年度（1年目）

■市民委員

采野 哲 中村 泰慧
 上山 新 杉山 サトリ
 田中 可奈子 木津 陽介
 中西 信樹 平松 成美
 松宮 可奈子 角川 康恵
 河村 奈美 石脇 和
 前川 裕美 榊 始
 大貫 摩由子 大塚 康将
 是永 麻記子 泉 婦美子
 青谷 啓司 原田 美代子
 三矢 大輔 藤野 政夫
 山田 哲也 熊谷 直道
 古堅 亜希子 栗津 泰蔵

■本部員

田谷 伸雄（市民生活部） 井上 昌司（都市建設部）
 西川 彰（政策部） 北村 英明（教育総務部）
 小島 猛（総務部） 三谷 浩（今津支所）
 柳生 徹（行財政改革推進局） 清水 勝徳（朽木支所）
 山本 純子（市民生活部） 日置 繁（安曇川支所）
 青井 真一（地域振興局） 中村 久雄（高島支所）
 川原林 剛（環境部）
 曾根 孝司（環境部）
 枝 秀樹（健康福祉部）
 木下 晃（子ども未来部）
 中島 勲（農林水産部）
 長瀬 正弘（商工観光部）
 森本 正則（都市建設部）

平成30年度（2年目）

■地域で支えあうコミュニティづくり

三矢 大輔 山本 純子（子ども未来部）
 杉山 サトリ 木下 晃（環境部）
 泉 婦美子 西村 陽子（健康福祉部）
 田中 可奈子
 前川 裕美

■地域で学び育つ

采野 哲 饗庭 眞二（市民生活部）
 平松 成美 北村 英明（教育総務部）
 是永 麻記子 日置 繁（安曇川支所）
 山田 哲也 中村 久雄（高島支所）
 中西 信樹

■多様な働き方ができる

木津 陽介 西川 彰（市民生活部）
 上山 新 小島 猛（総務部）
 大塚 康将 平井 秀明（政策部）
 藤野 政夫 長瀬 正弘（商工観光部）

■高島の文化

中村 泰慧 曾根 孝司（地域振興局）
 松宮 可奈子 森本 正則（都市建設部）
 原田 美代子 橋本 裕導（今津支所）
 井上 昌司（今津支所）

■活かす自然・守る自然

石脇 和 大貫 摩由子 藤森 泰男（行財政改革推進局）
 榊 始 角川 康恵 清水 勝徳（朽木支所）
 古堅 亜希子 長谷川 善一（農林水産部）
 川原林 剛（都市建設部）

■研究者

木村 道德	主任研究員	滋賀県琵琶湖環境科学研究センター	小野 聡	助教	立命館大学政策科学部
金 再奎	専門研究員	滋賀県琵琶湖環境科学研究センター	松井 孝典	助教	大阪大学大学院工学研究科
河瀬 玲奈	研究員	滋賀県琵琶湖環境科学研究センター	馬場 健司	教授	東京都市大学環境学部
熊澤 輝一	准教授	総合地球環境学研究所	岩見 麻子	特任研究員	法政大学地域研究センター
王 智弘	外来研究員	総合地球環境学研究所	堀 啓子	リサーチアシスタント	国連大学
上須 道德	特任准教授	大阪大学 CO デザインセンター			



第2期高島市まちづくり推進会議報告書

2019年3月発行

企画・制作

高島市まちづくり推進会議

発行

高島市

〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑 565 番地

TEL 0740-25-8000（代表）

FAX 0740-25-8101

<http://www.city.takashima.lg.jp/>

編集

王 智弘・熊澤 輝一・木村 道德

写真提供（順不同・敬称略）

今西 仁・城戸 重臣・たかしま冒険遊び場

DTP 編集

王 智弘

イラスト

松井 亜紀



お問い合わせ先

〈事業・冊子に関して〉

高島市役所 市民生活部 市民協働課
〒 520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑 565 番地
TEL: 0740-25-8526 (直通)
FAX: 0740-25-8156 (直通)
MAIL: kyoudou@city.takashima.lg.jp

〈市民活動に関して〉

たかしま市民協働交流センター
〒 520-1622 滋賀県高島市今津町中沼一丁目 4 番地 1
TEL: 0740-20-5758
FAX: 0740-20-5757
MAIL: webmaster@tkkc.takashima-shiga.jp